緑の雪

Green Snow

草谷 十織
Kusatani Tori

昔、氷の世界に住む少女がいた。彼女は年をとらず、広い山の中でたったひとり、永遠に雪を降らせ続けていた。しかしある時、彼女は山に迷いこんできたひとりの男と恋に落ちた。ふたりは夫婦の契りを結び、やがて女の子をひとり、間にもうけた。三人は山のふもとに移り住み、ずっとしあわせに暮らすと思われたが、男は彼女との大事な約束を破ってしまい、彼女は女の子を残したまま氷の世界に帰ってしまった。

その女の子が、祖母の祖母のそのまた祖母――わたしの遠い先祖にあたるという。

物心ついたころから、わたしはそう教えられて育ってきた。もちろん、本当のことだという証拠はない。しかし同時に、嘘だという証拠もない。

だからわたしは、山からやってきた雪女なのだと、いまでもそう信じている。

二

　わたしが以前住んでいたその町は、何となく夏のイメージがある。
　理由は自分でもよくわからない。わたしは何よりも雪を愛していたのだから、めったに雪の降らない都会に移り住んだ今となっては、雪深いその町の冬景色はもっと強く印象に残っていてもいいんじゃないかとも思う。
　しかし、わたしが真っ先に思い出すのは、まだ肌にべったり張りついた汗が生々しく記憶に残る、去年の夏。わたしが、その町で過ごした最後の夏のことだ。

　その夏の記憶の中でわたしは夏服のセーラーを着て、電車に乗って学校から家に向かっている。
　わたしの通っていた中学校から、その山のふもとの町にあるわたしの家まで帰るには、市街地から山奥までつながる鉄道で三駅ぶん乗って行かなければならない。これでもいちばん近い学校を選んだのだから、もっと山の方に住んでいるひとと比べるとまだいい方だったのかもしれない。
　およそ十分の間電車に揺られ、その町の駅に来たところでわたしは下車した。駅は、今わたしが乗ってきた山を上っていく路線と、川をへだてた隣町から来る路線とが交わる分岐点になっている。町が、線路で三つの区域に分けられた複雑な構造なのはそのためだ。駅舎に面している側がその区域のひとつだとすると、わたしの家は遠回りして踏切を渡らなければいけない向こう側の区域にあるので、わたしは改札口を通らずに――少ない利用客の中でも、これができるのは駅員に顔の通る地元のひとたちだけの特権だ――ホームの裏の抜け道をくぐり、線路の反対側に出る。
　その町は、夏になるといっそう引き立つ、どこか懐かしい雰囲気があった。古びた木造の駅舎。薄暗い抜け道。背の高いひまわり。木のトンネル。あぶらぜみ。知らないはずなのに、生まれる前からずっと知っていたような景色。――
「あれ、冬ちゃん」
　家へと続く路地に入ると、カメラを首にさげたお母さんと出くわした。
「おかえり。今日も図書委員で行ってたんだっけ？」
「うん」
「どう、収穫あった？」
「結局シール貼り手伝わされただけで読ましてもらえなかった。お父さんは？」
「家で寝てる。太陽見ただけで眩暈がするんだと」
　お父さんはここ最近ずっと寝ないで本を書いていた。執筆はかなり錯綜していた様子で、あげくの果てには失踪するんじゃないのかと、お母さんと二人ではらはらしていたところだ。
「仕方ないからそっと抜け出してきちゃった。これから散歩行くとこ。写真も撮るけど、一緒

に行く？」
「うーん、パス。早く帰ってシャワー浴びたい。暑くて死にそうだもん。……あ、でもそっちまで行くんだったらちょっとぐらい遠回りしても別にいいよ」
　わたしは隣町へ続く線路沿いの野道に、影を落としている一本のケヤキの木を指差す。
「オーケー。じゃあそこまでね。よーい、ドン」
　お母さんは一息にそう言うと、手を叩いたのと同時に駆け出した。そのまま全速力で、路地を飛び出して野道の上を走っていく。
「えっ、うそ。待って」
　わたしもつい反射的に体が動き、お母さんより一歩遅れて走り出した。だけど、その羽のような走りにわたしが追いつけるわけがない。――お母さんは、元陸上選手だ。
　余裕の表情でケヤキの木に一着ゴールインしたお母さんの横で、やっとのことでたどり着いたわたしは膝に手をついて息を切らせた。
「お母さ……はあ、ずる……」
「わはは。若いんだから、もっと鍛えなさい」
「もう、冗談じゃない……って。はあ、あたま、沸騰しそう……」
　わたしは思わずケヤキの根元に座りこんだ。幾重にも重なり合う葉が微妙に太陽をさえぎって、わたしの肌に緑の模様を映した。木漏れ日が、ぎらぎらと眼を刺す。火照ったからだを預け、わたしはぐったりとケヤキの幹にもたれかかった。お母さんは、得意げな笑顔のまま、黙ってわたしを見下ろしていた。
　わたしはここで、なぜか涙を流していた。あれっ、と思った時には、からだ中の水分が枯れてしまいそうなくらいの勢いで、大粒の涙が眼から次々に溢れ出していたのだった。
　何でわたし、泣いているんだろう。そんなことも分からないまま、とうとうしゃくり出してしまった。そしてしばらくの間、わたしは顔の上で汗と涙が混ざったものを拭うのに必死になり、お母さんも何も言わずに微笑んでそれを見守っていた。
「冬ちゃん。雪、降らせてみて」
　お母さんが突然そう言った。わたしはびっくりして顔を上げ、お母さんの眼をのぞきこんだ。
「ねえ、降らせてみてよ」
　お母さんはいつも通りの、好奇心に溢れた小学生みたいな表情と口調で言う。とてもかなったものじゃない。お母さんを前にしては、変に大人ぶった言葉で自分を取り繕うなんてことは通じないんだ、とそう悟った。
　わたしは、スカートについた草を払いながら立ち上がった。鼻をすすりながら、やっとのことで声を出す。
「でも」
「でも？」
「きっと、わたしじゃ、無理よ」
「わたしが手伝ってあげるって。昔から言ってるじゃん。お母さんが本気を出せばどんな季節

だろうと……」
「ホントにそんなことできるなんて、お母さんだってわかんないんでしょ？」
　自分でも驚くくらい大きな声が出た。どうにでもなってしまえと思った。言葉がうまくあやつれない。わたしにはもう、どうすればいいのかもわからない。
　気の狂うような猛暑だ。直射日光が降り注いでは雑草とわたしの肌を焼き、青臭いにおいがたちこめる。浮かされるように過ぎ行く夏の午後の一興は、いっそうわたしの雪女の血を駆り立てた。大人になりたくない。このままでいい。わたしを普通の人間にしようとするものは……世界はみんな凍ってしまえばいいんだ。
　お母さんは棒立ちになったわたしを黙って抱きしめた。わたしはどうしようもなく、その肩に顔を押し付けるしかない。するとお母さんはいきなり胸いっぱい空 気を吸いこんで、長い長いため息をついた。わたしの髪の毛がお母さんの吹く風に巻きこまれて飛ばされ、頭の右側がちょっぴり涼しくなる。
「ほら、冬ちゃんも」
　お母さんは言った。わたしは少しだけ顔を上げ、お母さんの肩越しに、ゆっくりと深呼吸をした。わたしの内側が、静かに冷えていくような感じがした。
　そしてお母さんは、わたしの知らない、英語の歌詞のついたメロディーを口ずさみだした。
　お母さんは歌もうまい。最初は鼻歌みたいに軽く歌っていたけれど、だんだん伸びやかに、だんだん美しく、蝉の声にも溶けこむくらいに透明な響きが、まるでケヤキの木と共鳴しているみたいに遠くまで広がっていく。
　わたしはその時、歌詞はほとんど聞き取ることができなかった。でも、曲の中に何度も出てくるあるフレーズだけは、妙に言葉が鮮明で、すっと頭に入ってきた。
　それは今でも、はっきりと思い出すことができる。

　　Please don’t flow so fast

「冬葉？　どうしたんだ、かわいいじゃないか」
「かっ、『かわいいじゃないか』じゃないでしょ？　高校の制服に決まってるじゃない。これから入学式。お父さんも出席するの」
　高校生活最初の朝は、起きてくるなり抱きついてくるお父さんを引きはがしつつ、日程を説明することから始まった。
　こんな奇妙な光景が新学期早々繰り広げられるのは、きっと世界で我が家だけだ、とわたしはひそかに思う。――お父さんは、親としてはちょっと常識のある大人とは言いがたい。
　だいたい、学校とか勉強とかいうものに全く執着がないのだ。わたしに対しても、好きなことできればそれでいいんじゃないの、といった感じの放任主義で、わたしが「高校行きたくないなー」と本音をもらせば、「ぼくはかまわないよ。それで冬葉がずっとぼくと一緒にいてくれるなら」、なんてことを平気で言う。一時期、ほとんど社会からドロップアウトしかけていた元売れない写真家兼詩人のお父さんに言われても、ちょっと説得力がないんじゃないかなとしか思えないけれど。
　ともあれ、そんな父から自立をはかるために、わたしはこれから三年間学校に行き通さなくてはならない。別に嫌いなわけではないが、集団生活は不得意だ。ちゃんと長続きするのかが心配だけれど、これも遺伝の体質なのだから、仕方ない。
「入学式か。苦手だね、そういうの。どうせ、特にやることもなくじっと待ってるだけでしょ？
　別にやんなくたって教育上に支障はないだろうにさ」
　見慣れないスーツ姿のお父さんが台所で味噌汁をよそいながら言う。
「それは冬葉も同じ。親が子供より先に弱音を吐くもんじゃないよ」
　わたしは淡々とそう返した。お父さんの意見には同感だが、ここでわたしがしっかり一般的な価値観を保っていなければ、我が家の未来は危うい。

　朝ごはんを食べ終わると、親子二人で電車に乗り、学校に向かった。
　その高校は広くて、歴史のある学校だと聞いていたので、わたしはどんなに古くて素敵な建物なのだろうと期待していたが、実際にそこに着いてみると、つい近年改装されたらしくほとんどの校舎が新しく白々しい輝きを放っていた。
「うわ、味のない校舎」
　見るなりお父さんがぼそっと呟いた。つい「だよねー。がっかり」と賛同してしまいそうになったが、これも無視した。
　正門の前には、新入生とその保護者がたくさん集まっていた。何をしているのかと思ったら、どうやら記念写真を撮るのに列をつくっているらしい。わたしたちはそれをやり過ごして門をくぐる。お父さんは、商品としてしか写真を扱わないから、記念に、なんていう軽い

気持ちでカメラを手にすることはしないのだ。
　ふと、その人ごみの中にお母さんの顔を見た気がした。もちろん、気のせいだ。
「『保護者の方は説明会を行いますので直接講堂までお越しください』、だってさ」
「そうか。それじゃしばらく別行動なんだな」
　お父さんは少しさびしげな顔をした。本当に、心の底からさびしがっている。わたしは不覚にも、ちょっとだけ泣きそうになった。
「うん。大丈夫。すぐに終わるよ」
　自分に言い聞かせるようにそう言った。大丈夫、つらいのはきっと最初だけ。こんなもの、早く慣れてしまえばどうってことないのだ。
「無事に済んだら、きれいな花でも買って帰ろうな」
「うん、わかった。じゃあ、行って来ます」
　わたしはいったんお父さんと別れて、教室へと向かった。

　教室の中は、すでにそわそわした空気が漂っていた。ひとりひとりの、話し相手を見つけなければという焦りと切迫感で満ちた視線が飛び交っている。そして早くも、その状態からうまく会話を成就させた人たちが集まって固まり、グループの分類がほとんど強制的に施行されていく。
　不思議なことに、人間という生き物はこの無言のアプローチによって、ほぼ確実に近しい間柄を探り当てることができるらしい。
　そうか、人と人との微妙な距離感というのはこういう風にできていくんだな、とわたしはひとりで納得しながら、おとなしく自分の席についた。
　他にすることもなく、わたしはひじをついて窓の外を見つめた。そのまま何もしないでぼうっとしていると、やがて春のにおいがしてくる。それは花の香りでも、 草の香りでもない。柔らかい日差しや、生暖かい風と一緒に時々ふわりとやって来ては、わたしの鼻から肺にかけてを変にざわつかせるのだ。
　わたしは、こういう言葉に表しがたい感覚にことさら敏感な人種だ。
　わたしのこの感覚を理解してくれた人は、お母さんの他に誰ひとりいない。お母さんは「自然からもらった不思議な力を持つ人間にしかわからないんだよ」と言った。「特に、春になると山に帰らなきゃいけない雪女は、ね。空気のにおいだけで、春が来たことがわかるようにできてるのよ」――以来、幼いわたしは春が来るたびに、山に帰らなきゃ、早くしないとからだが融けちゃうかも、なんて真剣にはらはらどきどきしていたものだ。
「ねえ、名前はなんていうの？」
　はっと我にかえった。見ると、クラスで真っ先に結束していた女子たちの集まりが、わたしの机の横にやって来ていた。いつのまに、と驚いたあと、わたしはやっと先ほどの質問が自分に向けられたものであることを理解した。
「あ、えっと、冬葉。鹿野冬葉。」
「ふゆは……冬ちゃん？　やば、めっちゃ可愛いじゃん！」

　わたしに話しかけてきた女の子が高らかに叫んだ。よく手入れされた髪。明るく絶えない笑い声。堂々たる口調。すでにたくさんの女の子が連れ添っているところをみると、クラスの中でも人づき合いが一番上手な子なんだろう。
「髪、長いんだね。真っ直ぐだし。腰まであるんじゃない？」
　どうやら褒められたらしい。わたしも何か褒め返してあげなければいけないんだろうか、と思ったが、「あ、ありがとう」と言って笑みを浮かべるので精一杯だった。
　その子もつられてえへっと笑うと――その中に困惑の表情も混じっていたような気もするが――「じゃあね、冬ちゃん」と告げると、足早に、仲間を連れて他の女子のところへ挨拶に回りにいった。
　しまった……。
　わたしも、自分から「人と人との微妙な距離」を作り出してしまった。

　やっぱり、『式』と名のつくものは嫌いだ。
　この会場にいるすべての人たちの感情を押し殺したこの表情といったら、まるでマネキンだ。しかも、この大人数でずらずら並んで、全員が直立不動で同じポーズをとっているのだから、マネキンよりも気味が悪い。
　お父さんはどうしているだろう。ふと思った。きっとわたしと同じように、息苦しい思いをしているにちがいない。もしくは、もうとっくに居眠りを始めているかだ。わたしはひとりで想像して、周りに気付かれないようにくすっと笑った。
　……あれ？
　一瞬、頭の中をお母さんの顔が横切った。まただ。今度は、いま校長先生が祝辞を述べているあのステージの脇の方にちらりと見えたような気がした。
　何だっていうんだろう。今のわたしの、安らぎを求めるこの心もとない思いが、わたしにお母さんの幻覚を見させるのだろうか。
　そうこうしているうちに入学式は終了した。列について歩き、また教室へと戻る。まだ今日はこれで終わったわけではない。担任の先生から色々連絡があるそうだ。正直なところ、一刻も早く家に帰りたい。あまりの気だるさに肩を落としながら、わたしは講堂を出た。すると、それと同時に隣の出入り口から、三四人の教師らしき男女が他愛ない会話をしながら歩いてくるのが見えた。
　そしてわたしは、その中のカメラを首にさげたひとりのひとに、思わず目を疑った。
　ずいぶん若い、男性のカメラマン。ひとりだけスーツが板についていないような様子なのでとても目立つ。とりあえずこの学校の生徒ではなさそうだが、新聞社のひとか、それともこの式のために雇われたひとなのだろうか。長い手足に似合わず顔の幼いそのひとは、まるで**好奇心溢れる小学生みたいな表情**をしている。――
　えっ。わたしは思わず心の中で叫んだ。
　唐突に、猛烈な既視感が襲い掛かってくる。**知らないはずなのに、生まれる前からずっと知っていたような景色。**

いや、わたしにはわかっていた。あれは、以前にも見た顔だ。わたしのいちばん大切なひとが、かつて見せた表情だ。でもどうして。どうして全く同じ雰囲気を持つひとが、この世にふたりといるのだろうか。そう思った時には、わたしは列を抜け出し、その男のひとを追っていた。彼はわたしのクラスの教室がある棟とは逆の方向へ歩いていった。わたしは複雑な構造をした校内を、彼の姿だけを頼りにたどっていく。

しかし、松の木が立ち並ぶ中庭に出たところでわたしは彼を見失ってしまった。どこに行ったんだろう。行くとしたらこっちだろうか、と適当な校舎を見つけて入ってみる。中は使われていない教室が並んでいて、人気がなく、しんと静まり返っていた。

そこでわたしは、本来戻るべき教室のある方向がわからなくなってしまっていることに気づき、冷や汗を流した。どうしよう。休憩時間が終わる前に、教室まで戻らなくてはいけないのに。いくらわたしでも、集合の時間に遅刻して、新しいクラスメートの前で恥をさらすのだけはごめんだ。

とりあえず、今来たところを戻ってみよう、と引き返そうとした。しかし、どうやってここまで来たのかすら覚えていない。為すすべもなく立ち尽くしていると、後ろから声をかけられた。

「あれ？　きみ、新入生？」

見ると、先ほどの男女の中にいた年配の男の先生が立っている。――その後ろに、お母さんとよく似た、あの彼も並んでいた。なぜか、胸がひやりとする。

「あ……はい」

わたしは彼の顔に気を取られながら、やっとのことで返事をした。

「どうしたの？　トイレならこの階にはないよ」

「いえ、あの、教室がどこにあるか、わかんなくなっちゃって」

「何だ迷ったのか。どこのクラスの子？」

「一年Ａ組です」

「Ａ組……特進クラスか。それならそこを右に出て、いったん正面玄関に出たほうがいいよ。そこからなら、張り紙があるからわかりやすい」

「あ、そうだったんですか、ありがとうございます」

なんだ、意外と近かったんだ、ということに少し恥ずかしくなりながら、ぺこりと頭を下げた。「まあね、迷う人は毎年いるからね」、とその優しそうな年配の先生が後ろのカメラマンと笑う。彼は、つられるように穏やかに微笑んでいる。

やっぱり似ている。よく見たら顔はそっくりそのままというわけでもなかったけれど、何と言うか、その独特のオーラはまるでお母さんの生き写しのようだ。

「顔色悪そうだけど、大丈夫？」

我を忘れて見入っていると、彼は心配そうな表情になって聞いてきた。思わずはっとする。驚いた。何て高い声なのだろう。そのはっきりとしているのにどこか優しい口調までも、お母さんを思い起こさせる。

「あっいえ、大丈夫です。本当にありがとうございます。助かりました」

「そうか。気をつけてね」

　何なのだろう、この妙な気分は。この人の眼を見ていると、色んな思いが頭にまとわりついて、何だか気持ち悪い。わたしはそれを振り払うように、早足で歩き出した。
「休み時間はあと三分だよー。急いでー」
　先生の声と、彼の視線を背に走り出す。
　ほんと、何だっていうんだろう。

「どうした？　やっぱり学校、嫌になった？」
「ん、だいじょうぶ。どうせこんなもんだって、予想はついてた」
　わたしはお父さんと買ってきた花を花瓶に生けながら言った。薔薇。マーガレット。かすみ草。スイートピー。
学校から花屋に寄り、電車で家に帰るまで、わたしは終始無口だった。
「ねえ、お父さん」
　ため息混じりの声でわたしは尋ねた。
「何？」
「お母さんて、兄弟いたの」
「兄弟って、冬葉。お母さんはひとり娘だから、ぼくは鹿野のおじいさんに頼まれてあの家に入ったんだよ。兄弟なんているわけないだろう？」
「だよね……」
　わたしは花を眺める。そして、あのひとの顔を思い出した。すると、急に泣きたい気分になってきて、思わずぎゅっと、お父さんに抱きついた。お父さんは何も言わず、わたしを受け入れてくれた。
「何かあったの？」
　間を置いてお父さんは尋ねた。わたしは黙っていた。さっきまで花束を抱いていたお父さんからは、色んな花の香りがする。
　しばらくして、わたしはぽつぽつとあのひとのことを話し始めた。その間お父さんはうん、うんと頷きながら、わたしの頭を撫でていた。
「……そうか。それはぼくも会いたかったな。彼はどこの人だったの？」
「わかんない。でも学校の関係者って雰囲気じゃなかった。たぶん、行事のために呼ばれたカメラマンか何かだと思う。……もう会えないのかな」
「写真が趣味の先生って線もあるだろう。心配する必要はないさ。どっちにしたって、似通っている人間ってのは、何かしら無意識に引き寄せられるものなんだから」
「そう……うん、そうかもしれないね」
　お父さんは、今度はわたしの髪の先を顔に近づけて撫でている。
　わたしはふいに、お父さんの手の中にある自分の髪を引っ張って離した。
「お父さん」
「ん？　何？」
「気持ち悪いよ」

　お父さんは一瞬きょとんとした。その隙に、無防備な脇に軽くチョップをくらわし、腕も振りほどいて逃げ出す。
「しまった。正気に戻っていたか」
　うろたえるお父さんの声に、わたしは笑った。

　わたしは自分の部屋にもどり、通学に使っているバッグの中を探った。そこから、いつも肌身離さず持ち歩いている『緑の雪』を取り出す。
　わたしは夏の思い出と、その傍らに立つお母さんの姿に思いを馳せる。
　お母さんがいなくなって、お母さんが育んできてくれた雪女としてのわたしもどこかへ行ってしまった。だから、今はこの『緑の雪』だけがわたしをつなぎとめている。――これがわたし。

　Please don’t flow so fast

　『緑の雪』を抱いて眼を閉じ、懐かしい歌を口ずさむと、眼の奥に雪がちらついた。――その向こうに夏槻さんの姿が見えるけれど、わたしはまだ、彼には話しかけない。

　ふと車窓の向こうを覗き込むと、さっきまで降っていた雪が止んでいる。
　わたしが乗っている電車は山から下りてくる電車の通過を待って、路線の分岐点であるこの駅に停まっていた。利用者は、わたしの他に数えるほどしかいない。当たり前といえば当たり前だ。雪が降るような時期にはとっくに閉山していて観光客も途絶え、ここより山奥に住んでいるひと以外は、ほとんど降りてしまっているのだから。
　しかし、そんな閑散とした電車に、乗りこんでくるひとりの男性があった。
「やあ」
　黒いコートを羽織った彼は、車内に入るなり、そう言って扉の近くの席に座っていたわたしに微笑んだ。
「久しぶりね」
　わたしは窓の外から目を離し、彼の顔を真っ直ぐに見上げた。
「きっと来るって、思ってたところよ」
　本日も、市営鉄道をご利用いただき、ありがとうございます、と車内のアナウンスが告げる。座山行き普通電車が、発車いたします。

「どうしてまた、わざわざこの電車に？」
　わたしは頬杖をついて、窓の外を流れる景色を眺めながらそう尋ねた。
「その質問、そっくりそのまま君にも返したいところだけど……。まあ、ちょっと山に登りたい気分になった、って感じかな」
「山はとっくに閉じてるよ」
「知ってるさ。でも、時々こうして行ける限りまで遠くに行きたいってことが、ぼくにもあるんだ」
「そう」
　しばらく、ふたりの間に沈黙が続いた。電車の周りは一面の銀世界だ。線路を走るがたんがたんという音すら、雪に吸い込まれてほとんど聞こえない。ここには光も闇も、生も死もなく、ただ無音だけがある。
「どうやら、君は不満みたいだね」
　今度は、彼の方から口を開いた。
「ううん、そんなことないわ。でも……そうね、わたしに会うためにこんなところに来るよりは、あの子を守ってあげてほしい、っていうのは少し、ある」
「心配ご無用さ。ぼくはちゃんとあの子を守ってるよ」
　わたしは思わず振り向いた。
「あなたは、あの子をずっとあの場所に閉じ込めておくのがいいと思ってるの？」

　彼は少し悲しそうな顔で、ただじっとわたしを見つめていた。いつのまにか、わたしたち以外の乗客は皆降りてしまったようだ。電車は少しスピードを落とし、車内ではまもなく座山、終点でございますというアナウンスが流れ始めた。
「ごめんなさい。少し酷なことを言ってしまったわ」
「仕方ないよ」彼は自分に言い聞かせるように小さな声で呟いた。
「いつだって、世界はぼくたちに厳しいものなのさ。現に君だって、結局この電車に乗ることを選ばざるを得なくなってしまったんだから」
　電車はゆっくりと終着駅のホームに滑りこみ、やがてブザー音とともに一斉に扉が開いた。
「降りないのかい」
「……気が変わったわ」
　わたしは、膝の上で強く手を握りしめる。
「わたしが言えたことではないかもしれないけれど。でも、それでもわたしはあの子を解き放ってあげたいの」
「君にそれができるの？　この駅でしか降りることができないのに」
「できるわ。あの子に預けたものがあるから、それを取りにいくのよ」
　わたしがそう告げたきり、彼は何も答えなかった。
　折り返しの発車時間を待つ電車は、絶えず寒空に煙を上げていた。

「あの子でしょ？　入学式、早々に抜け出した子」
「そうそう。ホームルームに平然と遅刻してきてさ」
「見た目、不良っぽくはみえないのにね」
「いつもひとりで、ずっと本読んでんだよ」
「たまに話しかけられたら笑うけど、何かこう、ひきつってんの」
「絶対作り笑いだよね」
　くすくす。
　くすくす。

「何読んでるの？」
　休み時間中に本を読んでいると、いきなり誰かに後ろから話しかけられた。
見るとそこには、短めの髪を小さく後ろでくくった女の子がいた。ああなるほど。確か、わたしの他にこのクラスの中ではぐれていた子だなと、何となく事情を悟った。
「『百年の孤独』。ガルシア・マルケスってひとの本だよ」
　図書室から借りてきた本だ。わたしはこの学校の図書室に通いつめては、毎日本をとっかえひっかえして読んでいる。高校のいいところは、中学校よりも蔵書が充実していることだ。
「へえ……珍しいの読んでるね。おもしろい？」
　実のところ、この本は教室の中で自ら壁を築くには弱いかと心配していたほどだったのだが、反応を見たところ彼女はあまり本に詳しい様子ではなさそうで、わたしは少しほっとした。しかし、それでも向こうは何とか話題を掘り下げようと必死になっていた。きっと、やっと見つけた話し相手に逃げられはしないかと、不安でたまらないのだろう。
　かく言うわたしはむしろ進んでひとりで行動している方で、わざわざ積極的に話しかけてくれるひとも、いままでの学校ではある程度見知った仲のひとが多いせいか、それほどいなかった。だから孤独に耐えかねて、わたしにすらすがってこようとするひとがいるという状況は初めてだと言ってもいい。――そんな中で、わたしはどういった話題が彼女と共有できる類のものなのかもわからず、ただ正直にその質問に答えた。
「うん。まだ途中だけど、おもしろいよ。中南米のけっこうシビアな描写が続くんだけど、同じテンションで魔法とか不思議な出来ごとが平然と登場しちゃったりして、えーと……。ごめん、わたしあんまりひとに本の説明するのって、得意じゃないんだ」
「あっ、そういうのってわかる。読書感想文とか、わたしいっつも書けないんだもん」
「うーん、わたしは、文章で書くほうはまだいいんだけどね。思った通りに書けるから」
「そっか。なんか鹿野さんって、すごく国語得意そうだもんね」
　授業が始まる時間まで、こんな調子の会話が続いた。あまり話はかみ合っているようには

思えなかったけれど、彼女は満足だったらしい。最後にはちゃっかりと「あたし、荻生茜っていうの。よろしくね、鹿野さん」と言って、肩の荷が降りたような笑顔で去っていった。
　どうして彼女の方は最初からわたしの名前を知っていたんだろう、とぼんやりと考えながら、ほとんど無意識のうちに級長の号令に合わせて起立し礼をする。そして着席してやっと、ああそういえば次の授業って何の教科だっけ、とふと気づいて、教壇に立った先生の顔を見た。
　そして、しまおうとした本を床に落とした。
　そこにはあの時のカメラマン――いや、先生が立っていた。
「はい。みなさん、はじめまして。みなさんの現代文の授業を担当させていただく、樫井といいます」
　彼は――樫井先生はそう言って、黒板に大きく「樫井智晴」と書いた。
「担当教科はもちろん国語。こっちの香椎、じゃなくて樫井ね。あと、何故かいつもよく生徒に間違えられたりするんだけど……。一応、勤めだして十数年のベテランです」
　ここで、教室内にちょっとしたどよめきが走った。「えー」「中学生みたーい」などと、前後や隣同士で囁き合ったりする声。せいぜい新米教師くらいの若さだろうと、見た目で当たりをつけていたのはわたしだけではなかったようだ。
「おいおい、何なんだこの空気。『永遠の十七歳』とでも言っといた方がよかった？」
　まだ硬い雰囲気の生徒たちから、ささやかに笑いが起こる。わたしにはそんな余裕はなかった。先生が笑顔を見せるたびに、複雑な思いに駆られて表情がこわばった。
「これから一年間、現代文の授業をしていくということで。色々やっていきたいと思うんで、よろしくお願いします。あ、ちなみに、写真が趣味でして、写真部の顧問やってます。部員少ないんで、興味あったら見学に来てみてね。そんで、よければそのまま入部しちゃってください」
　……そうか、国語の先生か。写真部の顧問の先生だったのか。わたしは拾った本をしまい、新品の現代文の教科書を出しながら、やっとのことで事実を飲み込んだ。
　そしてあらためて、朗らかに笑いながら授業を始める先生の顔をまじまじと見つめると、ふと思い立ち、机の中にくしゃくしゃにして入れていた一枚のプリントを引っ張り出して、急いでこう書いた。

仮入部希望部活動事前調査票

氏名　鹿野冬葉

第一希望　写真部
第二希望　なし
第三希望　なし

　配布された校内図を頼りに写真部の活動場所へ向かうと、そこは旧校舎の名残がある一番古い棟のさらに端、人気のない廊下に佇む何の変哲もない空き教室だった。
　重い引き戸を開けると、中にいるのはひとりの男子生徒だけだ。詰襟に留められたバッヂの

色を見たところ、どうやら一年生らしい。わたしは黙って、彼と一列おいた隣の席に座る。
　部屋の中は深い静寂に包まれていた。ただ、椅子がみしりときしむ音だけが響く。わたしは姿勢を正したまましばらく待ってみたが、誰も現れる気配はなかった。思わずもう一度プリントを開いて確かめる。第四選択教室。ここで間違いない。
　しかし、ここに一年生しかいないというのはとても妙だ。わたしは少し不安になる。先生は「部員が少ない」とは言っていたが、本当に、ここは実体のある部なのだろうか？
　するとその時、ドアが開く音と共に後ろの方から声がした。
「ああ、ごめんごめん」
　わたしははっとして振り返る。そこには、待ちわびた彼の——樫井先生の姿があった。
「大事なお客さんをお待たせしちゃったね。先輩たちがなかなか捕まらなくてさ。結局俺だけになっちゃったんだけど、構わず始めてもいいかな？」
「あ、はい」
　思わず彼の顔に釘づけになりながら、つられるままに小さく返事をする。先生は教壇まで歩いて行って手に持ったファイルを置くと、こちらを向いて、わたしたちの顔をひとりずつ確かめるかのように見渡した。
「よしよし。じゃあ始めようか。……あ、ちなみに俺は写真部顧問の樫井です。生徒会から来た調査票は見させてもらったよ。確か、ふたりとももう授業で会ってるよね？　改めてよろしく」
「よろしくお願いします」
「うーん、と。とりあえず、どうして先輩たちがいないかっていうことの説明からした方がいいかな？　ふたりとも不思議に思ったろ」
　わたしはとっさにどう反応していいのかわからず、曖昧に首を振った。正直なところ、わたしはとりあえず先生に会えることができさえすればよかったのだが——
「別に、まったく生徒がいないわけじゃないんだよ。この部に在籍してるのは全部で六人なんだけど、その内全員が何かしら他の部活と兼部してるんだ。まあ、もっとも俺が頼み込んで、名前だけ置いてもらってるようなものだけど。しかも、みんなもう片方の部活で活躍している生徒ばかりだからね……。もちろんこっちにも顔は出してくれるんだけど、いざ一年生の勧誘となると、どうしてもそっちに駆り出されちゃうみたいだな」
　困ったように肩をすくめて話す彼を、わたしはじっと見つめる。わたしは、このひとに会うためにここにやって来たのだ。するとちょうど目が合って、わたしたちはお互いに微笑んだ。思わず心が躍る。
「それじゃあ、肝心の部活内容について話そうか。一応は平日の放課後、この第四選択教室で活動ってことになってます。でも正直なところ、好きな時にいつでも来ていいし、何でも好きなことをしてもいい。自分のペースで利用してもらっても、誰もとがめるひとはいないからね。あえて言えば、どうせ集まるなら何か面白いことをしよう、っていうコンセプトは全体としてあるかな、うん。ある程度人数がそろうとぶらっとどこかに出かけたり、時々気が向くとみんなの写真をまとめて、誰に配るともない冊子を作ったりさ。……本当に自由な部でしょ？

だけど、もちろん写真部としての正規の活動もしてるし、それなりに撮ってやっていけるほどの設備も揃ってる。この下にある化学準備室の暗室も借りられるからね。実際、いまの部員の作品でいくつか入賞したものもあるんだけど……」
　彼はファイルのページをいくつかめくって、また閉じた。
「まあ、後で適当にみてよ」
「は、はい」
「さて、と。それじゃあ俺ばっかり話してるのも何だし、今度は自己紹介がてら、お二方の話を聞かせてもらおうかな。……そうだな、名前とクラスと、この部に興味を持った理由などを。じゃあ、そちらの男の子から」
　先生に指された彼は、迷いなくすっと立ち上がった。
「一年Ａ組の立花暁です」
　たちばな、あきら。わたしはここで、初めて彼が同じクラスの生徒だということに気づいた。しかも、さっきまでは無表情のまま黙っていたのでわからなかったが、はきはきと明るいクラスの委員長で、クラスメートからも先生からも人気があるひとだ。
「祖父の影響で、小学生のころから趣味で写真をやっていました。高校でも続けるかどうかはまだ考えているところですが、もし入部するならとことんやるつもりです」
「おお、小学生から。頼もしいね。それじゃ、もちろん専用の一眼とかもあるの？」
「はい。祖父に譲り受けたものなので、アナログのみですが」
「へえ、カッコいいなあ。俺はだいぶ前から両刀使い状態だから、アナログ専門はあこがれだよ。まあ、こんな変わった部だから無理にとは言えないけど、入部の際はよろしく」
「よろしくお願いします」
　何気ない受け答えだが、その物腰柔らかな姿勢から、彼の人柄の良さが滲み出る。とても優秀なひとなのだろう。先生に気に入られるのも、クラスメートから信頼されるのも頷ける。
「では、もうひとりの彼女にも、お答え願えるかな」
　ふいに先生の視線がこちらに飛んできて、どきりとする。どうしよう。興味を持った理由なんて、何も考えていなかった。まさか、樫井先生がこの部の顧問をしていると聞いたから、とは言えない。わたしはおそるおそる立ち上がった。
「一年Ａ組の、鹿野冬葉です。わたしの父は一応プロのカメラマンなんですけど、わたしはあまりカメラに触ったことがなくて。あまり興味はなかったんですが、えーと……。あ、でもいまの話を聞いて、すごく面白そうな部活だなあって……」
　必死に言葉を繋ぎ合わせてここまで言ってから、しまった、と思う。全然理由になっていないではないか。わたしは汗の滲む手を強く握りしめた。血の気が引いて、意識が遠のきそうになる。
　しかし、そんなわたしとは裏腹に、先生の顔はわたしの言葉を聞いてますますほころんでいった。
「でしょ？　すっごく面白そうでしょ」前に身を乗り出して、頬杖をつく。
「ひとりでもそう言ってくれる新入生がいて、嬉しいよ」

　青年男性にあるまじきあどけなさだ。わたしの胸は、人知れず高鳴る。こんな教師にはいままで会ったことがなかった――わたしのお母さんを除いて。
「それじゃあさ。うちの雰囲気知ってもらいたいってのもあるし、ぜひ新入生歓迎会におふたりをご招待したいんだけど、いいかな？　これも無理にとは言わないんだけど。でもきっと、退屈はさせないと思うな。どう？　来てみない？」
「はい！」
　つい勢い込んで返事をしてしまったので、わたしは慌てて声を絞って「喜んで」と付け加えた。
「立花くんは？」
「そうですね。できればぼくも参加したいです。先輩方にもお会いしてみたいですし」
「じゃあ、決まりだな。まあ日程は後ですり合わせるとして……。ふたりともどこに行きたい？　新入生をおもてなしする場なんだし、何でも提案聞くよ。水族館でも、公園でも。……ああ、でもさすがに、もう花見の時期じゃあないか」
「花見……」
　独り言のようにそう呟いて、ああ、とわたしは思った。こちらは桜が終わるのが早いのか。とうとう今年の春はほとんど見ないまま終わってしまった。あの町にいた時は家の敷地に大きな桜の木があって、毎年欠かさず見ていただけに少し悲しい。特に、夜に見る散り際の桜はいっそう暗闇に映えて、雪が降っているようで大好きだったのに。
「夜桜」
　わたしは、『緑の雪』が入ったバッグを強く抱きしめて言った。
「え？」
「わたし、夜桜が見たいです」

一

「雪女」
　廊下を歩いていると、すれ違いざまにちくり、と冷たい口調が胸に刺さった。わたしは思わず、おそるおそるその言葉を発した相手の顔を振り返って見ようとする。しかしその前に、わたしの隣にいたクラスメートのゆりが「気にしちゃだめよ」と声をひそめて言った。
「あいつら、どうせ六年生の連中でしょ？　上級生は鹿野先生と関わったことがないから、あんな言い方できるんだよ」
「そうだよ冬葉。おれたち五年じゃ鹿野親子は人気者だもん。いま先生が持ってる二年のクラスのやつらだって、きっとそう思ってるよ」
　そう言ったのは、同じくクラスメートのかっちゃんだ。ゆりと一緒で四年生になって初めてわたしと同じクラスになったのだが、ふたりとも三年生までずっとお母さんが担任していた縁で、昔からよく遊んでいたのだ。わたしは笑って首を横に振った。
「ううん、あたしは全然気にしてないよ。うちのお母さんが変だって思うのもまあ、わからなくはないしね」
　そう、正直なところ、わたしは変わり者のお母さんと同じ学校にいることが少し恥ずかしかった。わたしよりもずっとさばさばとして小学生らしいお母さんを見ていると、娘としてはどうしても他人のふりをしてしまいたくなるのが自然な心理というものだ。
「うんまあ、確かに鹿野先生はすごく変わってるよ。初対面で『わたしは雪女です』とか言うんだからさ。あん時はガキだからすぐ信じちゃったけど……いま考えたらすごくシュールだよな。でも、俺らなんかは前までずっと鹿野先生に担任してもらってたから、先生っていうのはああいうのが普通なんだって思ってたんだよ」
　かっちゃんが少し恥ずかしそうにそう言うと、すぐにゆりもその言葉に頷いた。
「そうそう。上林先生に変わった時はびっくりしたもん。毎年先生の家に遊びに行くのが普通じゃないの？　ってさ。親に聞いたらどうもそうじゃないらしくて。でもうちのお母さんなんか、うらやましいって言ってたよ」
「ほんと？」
「本当だよ。こんなにいい先生に会ったのは初めてだって」
「そうかあ……」
　わたしはしみじみと思い返す。――実際は、彼女たちのようにお母さんを慕ってくれるひとばかりではなくて、あまりに親密な関係を不安に思う子どもや親も中にはいた。お母さんは口にしないけれど、職員会議で度々お母さんの名前が挙がっていることもわたしは知っている。
　しかし、わたしはそのことを気に病んだことはひとつもなかった。お母さんのおかげで小学校にはクラスや学年を超えた友だちがたくさんいたし、何よりお母さん自身が、毎日心底楽しそうに仕事をしていたからだ。

「あっ、鹿野先生だ」
「ほんとだ。噂をすれば」
　ふたりの声にひかれるままに窓の外を見ると、そこには校庭で二年生と一緒にドッヂボールに参加しているお母さんの姿があった。必然と子どもたちに集中攻撃されてしまうので、大人気ないほど全力でボールを投げたり避けたりしている。からだの大きさが違うのでさすがに目立つけれど、それさえなければまさか担任の先生が混じっているなんて思いもしないほど、その笑顔は無邪気だった。
　もう、また昼休みを遊びに費やして。今日も家に仕事を持ち帰らなきゃいけないはめになるよ。
　わたしは心の中でそう言って苦笑したけれど、そんなお母さんをどこか誇りに思っている自分がいるのも、きっと確かだったと思う。

「わあ、すごくきれい。すごく寒い」
「誰よ！　春なんだからコートなんていらないって言ったひと」
「だって天気予報では今日の気温は五月中旬並みだって」
「どこの地域の情報だよ！」
「お願いだからみんな寄って座って」
「いい画なのにすごくいい画なのに手が震えてうまく撮れないよ」
　人気のない公園で吹き荒れる北風に混乱しながらも、どこか楽しそうな写真部員たち。その中で、わたしは夢をみているような思いで夜空に散る桜の花びらと、傍らの樫井先生の笑顔を見つめていた。

　入部届けを写真部に提出した立花くんとわたしは今日、現代文の授業の後に樫井先生に呼び止められた。何の業務連絡かと思ったら、さっそく新入生歓迎会を開くので、今日の部活は休みにすると言う。その代わり、夕方六時に会場近くの駅に集合するように、と。
　放課後、わたしは大慌てで家に帰り、お父さんに出かける旨を伝えた。もちろんお父さんはわたしの突然の申し出にうろたえたけれど、泣く泣く締め切りに追われている状態でわたしを止める気力はそれほどなかったようだ。結局、「ぼくを置いて行くのか」とかすれた声で力なく言うお父さんを尻目に、わたしは意気揚々と家を出たのだった。

「どう？　お気に召しました？」
　二年生の山元先輩が、わたしと立花くんの顔を交互に見て尋ねた。
「はい。とても」
　立花くんが答えるのに合わせて、わたしは深く頷いた。
「だよねー。あたしも気に入ったよ。ほんと最高のシチュエーション」
「この寒さと、あと移動中の思わぬアクシデントさえなければね」
　同じ二年女子の藤江先輩の言葉に、思わず全員が苦々しい笑いを浮かべながら先生に視線を向ける。
「はあ……先生の見た目に、もう少し高校教師の威厳があれば」
「うっせー。お前ら、俺がどんだけ大変だったと思ってんだ」
　樫井先生は、少し恥ずかしそうに息巻いた。
　実は、集合場所の駅から皆でここまで一時間かけて移動してくる途中、わたしたちは警察官に職務質問されてしまった。おそらく、自他ともに認める童顔の樫井先生を未成年と勘違いして、高校生の集団が保護者なしに夜の出歩きをしていると思ったのだろう。結局、樫井先生が写真部の顧問として付き添っているということを説明するのには、十分近くの時間を要した。

「だいたい！　お前らというやつらは、先輩の半分が遅刻してくるわ自転車曲乗りするわ当然のようにアルコール持参してくるわ……俺をクビにする気か」
「まあまあ、いいじゃないですか。おまわりさんには見つからなかったんだから」
「とか言って。俺のチャリに堂々と乗ってきたのは、大河内だろ」
「そのチャリで、遅刻してまでこんな辺境に飛ばしてきたのは高取さんだった」
「それなら言わせてもらうが去年の合宿の時に」
「文化祭のギャラリーカフェで」
「俺が開校記念日で競歩大会の」
　悲しいことに、先生が説教をしようとしてもどこか迫力に欠けているせいか、先輩たちは反省しない。それどころか、いつのまにか写真部員がいかに今まで問題を起こしてきたか、という口論になっている。
「……すまないね、うるさくて」
　樫井先生はその様子にため息をついて、わたしたち一年生を半ば哀れむように言った。
「ああみえて実力はあるやつらなんだよ。写真部がこうして存続していることが救い、というか、何よりの証拠だ。いい意味でも悪い意味でも問題児ってところかな。……まあ、退屈はしないと思うから、どうか運が悪かったと思って巻き込んでくれてやってくれ」
「あ、いえ、ぼくは……」
　立花くんは複雑そうな表情になった。陸上部と兼部しているスプリンターにして成績優秀。級長と生徒会会計を兼任し、先生からもクラスメートからも信頼される人格者。そんな隙のない彼が突然こんな奇異な集まりに招かれて、さらには飲酒まですすめられそうになっているのだから、反応に困るのは当然のことだろ う。――しかし、おそらく彼が言いかけたであろうことに、わたしは全面的に同意する。
　こういうのも、悪くない。
　そう、教室の中とは違って、妙に居心地のいいこの場所の空気。それは樫井先生を中心に、個性的な部員たちによってかたち作られていた。写真部の部長であり、軟式野球部のエースでもある高取先輩。写真部の副部長のみならずディベート部や生徒会でも重役をつとめる、才色兼備の石上先輩。吹奏楽部の部長でドラマーの三年生、大河内先輩。二年生にして脚本と演出を任されている演劇部部長の樋野先輩、女子ハンドボール部ストライカーの山元先輩、写真でも賞を取った美術部の藤江先輩。 ――彼ら全員が、樫井先生と何らかの接点があり、その上でスカウトに快く応じてくれた生徒たちなのだという。
　それに加えて、この立花くんの入部だ。実はこの部は、何の取りえもないわたしが恥ずかしくなるほどの実力者の集まりだったのだ。そんな人間を自然と引き寄せる、樫井先生の人柄によって。わたしは、先生の笑顔に予感していたものが見事に的を射ていたことに、おそろしさすら覚えていた。
　視界は澄み渡り、名状しがたく冷たいものが背中を走る。
　いったい何回目だろう。ひとに囲まれながら見る桜が、こんなにうつくしいと思えたのは。

ああ、そういえば前にもこんな光景をみたことがあった。
お母さんの実家である鹿野家の広い敷地の中で、自由に駆け回る子どもたち。響き渡る笑い声。古い桜の木。そして、その傍らにいるお母さんの、学校であろうと家であろうと変わることのない、あの笑顔。思い返せば、小学生のころはどんなに賑やかな雰囲気に包まれていても、不思議と「言葉に表しがたい感覚」の妨げになることはなかった。
そして、いまも同じだ。降りしきる花びらは、わたしの視界の中で確かに雪に変わる。あの時のように。

ねこねこねずみとり
いたちがおいかけた

ふと桜の木の下に目をやると、夏槻さんが立っている。
彼は、いつかわたしが読んだ本に出てきたお気に入りの登場人物と同じ、黒いスーツに帽子という出で立ちをしている。容姿は少しお父さんに似ていて、それでいて年はいくつなのか、男のひとなのか女のひとなのかもわかりかねるような、そんな不思議な雰囲気だ。
彼は語らない。ただわたしをそばでそっと包み込むように、風に吹かれているだけ。お母さんはそのさまを夏のケヤキにたとえたけれど、本当にぴったりの呼び名だと思う。わたしたち雪女を、強い日差しから守ってくれているからだ。
こうして出会ったのはいつぶりだろう。お母さんがいなくなってから、かもしれない。もう二度と、この世界に来てくれることはないと思っていた。しかし、それは要らぬ心配だったのだ。『緑の雪』の中だけじゃない。いま、ここにいるわたしにも、彼の前に立つ資格があるのだ。
なぜなら彼は、かつてお母さんにとってもそうだったように、わたしの運命のひとなのだから。
それゆえに、お父さんとお母さんはわたしを「冬葉」と名づけたのだから。

「……鹿野さん？」
樫井先生の声に、わたしは一気に意識を引き戻された。驚きのあまり、つい目を見開いて先生の方を振り向いてしまう。しかし、それが逆に功を奏したようで、先生は顔の緊張を解いて穏やかに笑った。
「びっくりした。お酒、飲み過ぎたのかと思ったよ。さっきからぼうっとしてるからさ」
「すみません。わたし……」
「何これ！　鹿野さん、もしかして日本酒飲んでるの？」
石上先輩が、わたしの手元をのぞいて声を上げた。
「しかも何、これひとりで空けちゃったの？　え、何で？　何で平気なの？」
「ほほう、鹿野さんがいける口とな」樋野先輩がその声を聞きつけて、真っ赤な顔で瓶を片手にやって来た。

「こりゃあ気づかなかった。ささ、どうぞどうぞ」
「わ、ありがとうございます」
「ほれ、立花くんもひとつ、どうだい」
　わたしにお酌をしただけでは飽き足りない先輩は、隣で静かに緑茶を飲んでいる立花くんにもすすめ出す。
「こら。立花くんは節度をもってちゃんとノンアルコール貫いてんだから、無理にすすめちゃ……」
「いえ。ぼくもいただきます」
「へ？」
　石上先輩が呆気にとられている間に、樋野先輩はすばやく立花くんのコップに一口分の日本酒を注ぐ。それから彼は無表情のまま、しばらくその透明な液体を黙って眺めていたが、やがて意を決したのか、流しこむように勢いよくコップを傾けた。
「……俺に、節度なんかありませんよ」
　そのままそれをゆっくり飲み下すと、立花くんは弱々しく呟いた。
「た、立花くん？」
「優秀でも何でもない。ただ頼みを断れないだけなんですよ！　俺は、中途半端に放っておくのが大っ嫌いですからね。そうとも知らずにあいつら、ちょっといい顔しただけで全部押しつけてきやがって。何が頼りになるだよ、ちくしょう」
　口調が荒々しくなるのに合わせて、立花くんの顔はみるみる真っ赤になっていく。
「こんなはずじゃなかった。俺はもっと自由にやるつもりだった。一年の春にしてぶっ壊されたんだ。俺の高校生活は！」
　あまりの豹変に全員がしばし呆然としたが、やがて先生を除く男性陣がそれを面白がって、おうおう、とかそうかそうか、とかせっかくだからここで吐き出しちまえ、などと声をかけながら絡み始めた。
「はは、立花くんも陥落、か」
　その一部始終を眺めていた先生は、まんざらでもないような様子で言った。
「案外早かったけど、大丈夫かな」
「いざとなったら、わたしが止めます。まあ、あのひとたちは潰れさせるようなことはしませんから、気をつけて様子をみておくだけでいいとは思いますけど」
　どうやらこの状況に慣れているらしい石上先輩が、冷静に答えた。
「まあ、石上がいればひと安心てところか。……あ、いまさらだけど、鹿野さんの方は大丈夫なの？　親御さんとか」

「あっ、はい。うちは変わってる親なので、だいたいのことは平気です」
「そっか、お父さんはプロのカメラマンだっけ？　いいなあ。楽しそうだなあ」
　先生の言葉と、家に残してきたお父さんのやつれた顔とのギャップに、つい苦笑いする。
「そんなことないです。気苦労が絶えない家ですよ」わたしは顔を横にそらして言った。

「お前は雪女の娘だって、言うような親なんですよ」
　沈黙が桜吹雪を背景に流れて、しばらく経ってからわたしははっと顔を戻した。
「あ、えっと、その、親があんまり真剣な顔で教えてくるものだから、小さいころはつい本気にしちゃって。恥ずかしかったんですよ。周りの子に馬鹿にされちゃって」
　必死に補足しながら、わたしは焦るあまり泣きそうになっていた。みんなが見ている前で、何てことを言ってしまったのだろう。こんな、わけがわからないと思われかねないようなことをうっかり口にするなんて。
「うらやましい」
「え？」
　わたしは、うつむいていた顔を上げて先生を見た。笑っている。
「ますます楽しそうじゃん。……そうか、雪女の娘かあ。俺もそんなロックなこと言ってくれる親、欲しかったなあ」
「あ、わかります先生。うちみたいな平凡などこにでもある家庭で育ってると、親がカメラマンってだけでうらやましいですよ」
「ていうか、鹿野さんが雪女って何となくわかるなあ。色も白いし。案外、本当のことだったりするんじゃない？」
　ははは、先生、セクハラー、といつのまにか話を聞いていた先輩たちに樫井先生がはやされる。
「でも、先生だって色白いじゃないですか」
「言われてみれば。それに、雰囲気似てますよね。鹿野さんと先生」
　藤江先輩の言葉が、またあの名状しがたい感覚をぞくりと蘇らせる。
「なんか、兄妹っていうか。おふたりとも少年っぽい顔立ちなんですよね。先生の背を低くして女装させたら、鹿野さんに見えなくもないっていうか」
「おいおい、そういうのは普通逆だろう」
　先生がそう指摘すると、すでに酔いが回っている部員たちは腹を抱えてどっと笑った。特に高取先輩は、女装とか、ひひ、先生今度やってみてくださいよ、ひひひ、と引きつけを起こしかねない状態だ。
　わたしはそれどころではなかった。この思いがけない状況を整理するので精一杯だった。――先生が、わたしに似ている？　他のひとの目から見ても？　お父さんは、お母さんに兄弟はいないと言った．実際に鹿野家は代々女系一族で、そのためにお父さんも婿入りしてお母さんと結婚したのだから嘘ではないだろう。先生はお母さんより三つ年下の三十四歳だから、わたしの兄弟ということもありえない。ということは、本当に他人なの？　こんなに似ているのに？
　こんなにも、あのころのわたしを思い出させてくれるというのに？
「もし、時に鹿野さん」
　我に返って声のする方を振り向くと、一足先に騒ぎを抜け出していた大河内先輩が横に座っていた。

「確か鹿野さんって、立花くんと同じクラスだったよね。Ａ組、で合ってる？」
「はい」
「女子にさ、青田夕貴さんって子がいるでしょ。知らない？」
「青田さん……？」わたしは首を傾げた。
「あれ？　わかんない？　こないだ吹奏楽部に入ってきた子なんだけどさあ、これがすごいのよ。強そうな一年生の女の子は、みんなあの子についちゃってさ。もうすでに学年内で階級が形成されちゃってんの」
　ここまでの説明でわたしは「ああ」と納得した。入学式の日に、最初にわたしに話しかけてきたあの子か。吹奏楽部に入っていたとは知らなかった。
「彼女、クラスではどんな感じ？」
「先輩がおっしゃった通りの感じです」
「こんな感じかあ」
　ふむ、と先輩は少し考え込んで、手に持っていたビールを飲み干した。
「ま、気にしないで。俺にはちょっと変わった子に見えたから、クラスでの顔を知ってみたかっただけなんだ。同じならいいんだよ、うん。ああ見えて悪い子じゃあないみたいだから、よかったら仲良くしてやってよ」
　話の意図がいまいちよくわからないままに、はい、と返すと、先輩は本当に気にも留めていない様子で、さて、また飲むかあ、と言って立ち上がった。
「季節外れの夜桜って、鹿野さんの提案なんでしょ。いいセンスしてると思うよ。……じゃ」
　今度こそ、先輩はまた騒ぎの中に戻っていってしまった。わたしは再び、桜の木立の中にひとり取り残される。その時、わたしは何かを言おうとしたけれど、次の瞬間にはもう忘れてしまった。
　コップの中に、溶けるように花びらがひとつ、舞い落ちた。

Please don’t flow so fast

　わたしは、傍らのバッグにそっと手を触れた。『緑の雪』が入っている、使い慣れた革のバッグに。そして再び、夏槻さんが立っていた桜の木の下に目を向けて思う。
　――もしかするとあれは、夢ではなかったのかもしれない。

　電車は雪深い山をゆっくりと下り、再び分岐点のこの駅に停車した。わたしと彼は、手をつないでホームに降りる。新しく積もった雪のふわりとした感触と、それをぎゅっと踏みつける感触が靴の裏から伝わってきた。
「雪、止まないね」
「ええ」
「これからどうするつもりなの？」
「わたしはとりあえず家に戻るわ。あなたは？」
「ぼくも一緒に行くよ」
「……ストーブ点かないけど、いいの？」
　彼は、黒い手袋をはめた手でわたしの手を握った。「うん」
　駅には、わたしたち以外に誰もいないようだ。ただしんしんと雪が降り積もる中、線路の融雪装置だけがわずかに水の音を立てている。わたしたちはいつもの抜け道をくぐり、もう片方の線路をまたいで家へと続く路地へ出た。
「帰るのは、久しぶりだな」
　彼はひとりごとのように呟いた。そのどこに向けるともない響きも、わたしたちの足音も、すべては白の中へ吸い込まれていく。
　そうしてわたしたちは家に帰った。雪に埋もれていた玄関口を掘り出し、きしむ引き戸を開けてやっと中に入る。長い間開け放されていた室内は、外よりもずっと冷えきっているように思えた。わたしは靴についた雪をはらって中に上がると、真っ直ぐに書庫を兼ねた居間へと歩いて行った。彼もそれに従い、黙って後をついてくる。
　そのままわたしは目的もなく、部屋の壁にところ狭しと並べられた本棚の蔵書点検を始めた。一方の彼は、冷たい畳の上に寝そべって、安らかに白い息を吐く。あまりの寒さからか、ふたりの間にはほとんど会話がなくなっていた。
「あ、『氷』がない」
　海外文学の棚に差しかかったところで、わたしは一冊欠けているものに気づいて声を上げた。
「アンナ・カヴァンの？　あの子の部屋じゃないかな」
「取ってくるわ」
　わたしは居間の隣にある小さな部屋に入った。案の定、参考書やノートなどの勉強道具が広げられたままになっている机の上にぽつんと一冊、アンナ・カヴァンの『氷』が置かれている。わたしはそれに手をかけようとして、すんでのところで止めた。
「取ってくるんじゃなかったの」
　居間に戻ると、彼は目を閉じたまま静かに言った。

「どうせわたしには、触れられないものよ」とわたしはかぶりをふる。
「そう」
　彼は再び、深いため息をついた。ほの暗い部屋の中で、白い煙が幽霊のように浮かび上がる。その姿はなぜかとても愛おしく、わたしは、抱きしめそうになるのをこらえるのに必死になった。
「ねえ、夏槻さん」
　わたしは、ふいに彼に呼びかけた。
「……久しぶりだな。その名前で呼ばれるのも」
「ここでこうしていても仕方ないわ。お散歩に行きましょうよ」
「どこに？」
　わたしは縁側まで歩いて行って、すっかり雪に覆われた庭越しに外を見やった。
「ケヤキの木のところまで」
　その声に、彼のまぶたが微かに動く。
「あの子は、きっとあそこにいるわ」

「冬ちゃん、おはよう」
「おはよう」
「借りた本、読んだよー。面白かった」
「本当？　よかった。一番始めに貸す本にしては突飛なの選んじゃったかもって、後悔してたんだ」
「んー。冬ちゃんほど深く理解してないかもしんないけど、こういうの嫌いじゃないよ。はい、ありがとう」
　青田さんはそう言って、席についているわたしにアンナ・カヴァンの『氷』を差し出した。顔を上げると、青田さんを取り巻く女の子たちが彼女の肩越しにちらりと見える。その、わたしたちのやり取りを遠巻きに観察する視線が、容赦なく刺さって少し痛い。そして、教室の片隅にひとりでぽつんといる荻生さんの目も。
　ごめんね、別にあたしから行動したわけじゃないんだよ、と罪悪感に駆られながら、わたしは「どういたしまして」と言って本を受け取った。

　ことの発端は、数日前の朝にさかのぼる。
　その日は早めに教室に来ていて、いつものようにひとりで本を読んでいると、同じく早めに登校した青田さんに、唐突に「おすすめの本、教えてよ」と話しかけられたのだ。
　もちろんわたしは戸惑った。クラスの中で一定の地位を築いている青田さんが、わざわざわたしに話しかける必要性がわからない。そう思いはしたけれど、本の紹介を迫られては適当にあしらうわけにもいかない。そこでわたしは、わたしがこれまで読んできた本の傾向から青田さん自身の読書歴についての質問まで、午前中のすべての休み時間を費やして彼女と語り合うはめになってしまった。
　そして意外なことに、青田さんはそこそこ数の本を読んできていた。もちろんわたしのお父さんやお母さんの学生時代とは比べものにはならないけれど、児童文学やファンタジーから国内外の近代文学まで、押さえるべきところはちゃんと押さえている。そんな誰もが通る基礎ともいうべき本を飛ばしてきたこともあるわたしよりも、青田さんはむしろ正統な読書家かもしれなかった。――それにも関わらず、彼女はわたしのとても標準的とは言えない本の趣味に、自ら興味を持って近づいてきたのだ。
　結果、その日以来青田さんが時々自分のグループを抜け出してきてわたしと本の話題を交わすようになり、いまの状態に至るのだった。

「俺はこれから出張に行かなきゃならんから、今日のホームルームは自習にする」
　四限目に教室にやって来た担任の木下先生が、手に持ったファイルで教壇を軽く叩いて

言った。
「……が、あいにく体育祭まで日がないもんでね。ここは、級長に指揮を取ってもらってクラス競技について話し合う時間にする。それじゃ立花、よろしく頼む」
「はい」
　先生に指名を受け、立花くんが席を立って教壇に上がった。そのまま、いつものように手際よく議題の説明に入る。
「クラス競技についてとのことですが、一年生が参加するのは大縄跳びと騎馬戦のふたつです。まずは大縄跳びで必須になっているクラスごとのパフォーマンスについて話し合ってから、男女ごとに騎馬戦のチームを決めてもらいます。何か意見はありますか？」
　担任の目を逃れて少なからず浮ついていた教室の空気が、急にしんと静まりかえった。誰も手を挙げず、代わりにそんなの決めたいひとが決めればいいでしょ、 とでも聞こえてきそうな無言の圧力が立花くんにのしかかる。彼はそれに対して温和な表情を貫いていたが、内面では非常に苛立っていることが、わたしの目には明らかだった。
　立花くんは小さくため息をついた。
「本当にありませんか？　もしいま意見が出なければ後回しに……」
「立花くん」
　わたしは堪えかねて手を挙げた。
「クラス全体だと話しづらいと思うので、有志を募って後日、少人数で話し合うのはどうでしょう」
　瞬時に、クラスメイト全員の鋭い視線がわたしに集中する。最初から、問題児のわたしに――時々授業を抜け出したりするわたしは、担任の先生はもちろんクラスメイトたちにも評判が悪かった――発言権はなかったかのような反応だ。しかし立花くんだけは、少しほっとしたような顔になってわたしの提案に答えた。
「そうだね。その方が効率はよさそうだ。それでは鹿野さん、参加してくれますか？」
「はい」
「わたしも参加していいですか？」
　わたしが返事をするのとほぼ同時に、青田さんが手を挙げた。こちらにも、彼女の取り巻きを含むクラスメイトたちの驚愕の視線が注がれる。
「副級長が話に加わらないのはさすがにどうかと思ったんですが、どうでしょう」
「……わかりました。お願いします」
　立花くんは面食らったような表情になり、そこから少し間を置いてそう言った。状況がうまく飲み込めなかったが、一応の形式としてわたしも「よろしくお願いします」と言い、青田さんに会釈をした。
　彼女はいつもの自信たっぷりの笑顔で、晴れやかに笑った。

　その後の、男女に分かれての騎馬戦のチーム決めの雰囲気には目に余るものがあった――青田さんのグループが進行の実権のほとんどを握り、他の女の子の意見がまったく通らない状況

だった――ので、わたしはまた教室を抜け出して図書室にやって来た。後ろ側の入り口から、司書の先生に見つからないように書架の間へそっと忍び込む。
　そうして、目当ての文芸書の棚にうまく辿り着いたところで顔を上げると、わたしはあやうく大声を上げかけた。
「……樫井先生！」
「あれ、鹿野さん。どうしたの、こんなところで……」
「しーっ！　先生、小声でお願いします」
　慌てて人差し指を口に当ててそう促すと、先生は事情を察したようですぐに声をひそめた。
「さては、またサボりだな？　木下先生が泣くよ。俺もひとのこと言えないけど」
「えへへ。どうかご内密に」
　先生が苦笑しながら手に持っている本で軽く頭を叩くので、わたしは指を立てたままでそっとささやいた。
　すると次の瞬間、わたしはその大判の本の、見覚えのある装丁に目をとられた。霧に包まれた森の風景をとらえた写真を使った緑色の表紙。そして、控えめに刷られた著者名――鹿野夏槻。
　わたしは、思わず大きく口を開けた。
「先生、その本……」
「しーっ！」
　今度は先生に指を立てて制され、慌てて口をつぐむ。
「か、鹿野さん、この後も昼休みなんでしょ？　部室で話そう。部室で」
　わたしは開いた口がふさがらないまま、声を立てずにゆっくりと頷いた。

「いったいどうしたの、鹿野さん」
　何とか図書室を抜け出し、早足で部室の中に辿り着くと、先生は不思議そうに首を傾げてそう尋ねた。写真部の部室である第四選択教室は遠く、大股ですばやく歩いてきた先生が涼しい顔をしている一方で、わたしはとっくに息が切れていた。
「先生、その本、どうして……」
「ああ、これ？　最近ファンになった詩人の本なんだけど、そのひとの詩集は全部絶版になってるみたいで。版元に問い合わせたら在庫があったから、まとめて取り寄せてもらってる途中なんだ。それで、とうとう到着するのも待ちきれなくなって、いま図書室で借りてきたところ」
「それ、わたしの父ですよ」
「えっ」
　先生の目が丸くなった。どうやら、本当にお父さんの本と知らないで借りていたらしい。
「それじゃ、鹿野夏槻さんって……もしかして本名？」
「名前はペンネームですよ。まあ、名字も母の家に婿入りしてからのものなんですけど」
「そうなんだ。鹿野さんと似たような名前だなとは思ってたけど、まさかお父さんだなんて

知らなかったよ。鹿野さんも、プロのカメラマンとしか言わなかったし」
「わたしも、あえて言ってなかったんです。お父さんもいまはもう創作活動はしていなくて、フリーのカメラマンとしてしか仕事を受けてないみたいなので」
「どうしてやめちゃったの？　……って、聞いてもいいのかな」
　おずおずと尋ねる先生の声にぞっとしながら、わたしは「いいですよ」と答えた。まるで、お父さんが詩人をやめたことを知ったお母さんに、問いつめられているみたいだ。
「わたしもよくわからないんですけど。本人は、『詩が書けなくなった』って言っていました。拠点も母の田舎から東京に移して、これまで出した本の再版も全部断っちゃって。元から気まぐれなひとですから、あまり深い意味はないかもしれませんが……」
「うーん」
　先生は本を開いて、ページを何枚かめくりながらうなった。
「一読者としては残念だなあ。俺、自分もかじってるせいか、安部公房みたいな写真を撮る作家が好きなんだよ。鹿野さんのお父さんのことはさっきも言った通り最近知ったんだけど、詩っていう形式も相まって、まるで言葉がそのまま映像になったみたいでさ。その写真すら世界をそのまま写したものとは思えなくて、幻想的で……。とにかく心酔したんだ。俺がどうこう言っても仕方ないかもしれないけど、このひとの本がもっと読みたかった、って心から思ったよ」
　――わたしは先生の話を聞きながら、足先まですっかりしびれていた。おそろしくすらあったのだ。目の前で語っているこの男性が、まったくの他人だということに。
「……って、にわかのファンが語ってもいい気分はしないか。はは、ごめんごめん」
　頭をかいて照れくさそうに笑う先生の姿に、なぜか胸が苦しくなる。
「そんなこと……そんなことないです。先生が、ほんの数年間詩を書いていただけの父を知っていてくださっただけで、こんなにうれしいことはないですよ」
「それはよかった。……そうか、鹿野さんは雪女と詩人の娘というわけか。それじゃあ鹿野さんの本好きも、お父さんから受け継いだ性質なのかな」
「ええ」
　その雪女の母も本好きだったんですけどね、とつけ加えそうになったが、それはぐっと飲みこんだ。
「わたしたち一家は、本の趣味だけは一貫してるんです」
「へえ。ますます聞かせてもらいたいな、鹿野家の読書の話。一介の高校教師じゃ、なかなか深い文学談義をする機会はないからね」
　ここで、四限の終わりを告げるチャイムが鳴った。
「……あ、悪い。俺、放課後の会議の準備せにゃならんから行くわ。今日の部活、俺は行けないって部員たちによろしく言っといてくれ」
「了解しました」
「じゃあまた話そうな、鹿野」
　いつもの屈託のない笑顔を残して、先生は部室を去っていった。

　わたしはそのまま、先生と話がはずんで嬉しいのか苦しいのかよくわからない複雑な感情を抱えてしばらく呆然としていた。――結局その昼休みは、部室に昼食を食べにやってきた写真部員たちにつかまって、自分の弁当を食べ損ねてしまったのだった。

「くっそ、何なんだようちのクラスは！」
　放課後に部室にやってきた立花くんは、険しい形相で机を叩いた。その衝撃で、上に置かれていたシャープペンが勢いよく跳ねる。しかし、彼の素の性格ににすっかり慣れてしまった部員たちは、特に取り乱すこともなく「お疲れさまー」と声をかけた。
「今日もなかなかいい豹変っぷりですなあ」
　山元先輩が間食のメロンパンをほおばりながら言う。
「ったく……男子は男子で、女子は女子で陰口ばっかでお互い関わろうとしねえし……。クラス全体の話し合いになったら、急にだんまりとくる。あいつらは何をしに教室に来てるんだ？」
　もはや遠慮も何もなくなった立花くんの言葉に、それは仕方ないよ、と思うのと同時に確かにおかしいよなあ、とも思った。教室に満ちているのはみんながみんな、無難につき合えるひと以外と関わるのをおそれている雰囲気ばかりだ。自分たちが理解できないものは輪から追い出し、徹底的に排除する。積極的にその輪に入ろうとしない、それができないわたしはそれがいいとか悪いとかという以上に、ただただ息苦しかった。
「……でも、鹿野が手を挙げてくれて、正直助かったよ」
　一通りの愚痴を言い終えてため息をつくと、立花くんは言った。
「まあ、お互いさまでしょ。あたしもクラスの空気、乱してるとこあるし。立花くんには中間職押しつけて、申し訳ないと思ってるよ」
「それは別にいいんだ。いいんだけどさ……何で、わざわざ青田とここでパフォーマンスの話し合いをする必要があったんだ？」
「ごめん」わたしは顔の前で手を合わせた。「青田さんが、どうしても写真部をのぞいてみたいって言うから。……って、立花くん、もしかして青田さんと知り合いなの？　呼び捨てにしたりなんかして」
「ああ。一応、同じ中学校ではあったけど」
「へえ、同じ出身校で同じクラスか。珍しいな」部室の一番隅のところにいた高取先輩が、こっちに身を乗り出してきた。「……え？　ってことは、鹿野さんもいままで知らなかったの？　両方と面識あるのに？」
「だって、ふたりが親しそうなところ、一度も見たことないんですもん」
「そりゃあ、いくら同じ中学校っつっても……俺は苦手なんだよ、あいつのこと。たまたま中三の時に、同じクラスになっただけだけどさあ」
　立花くんは頭を抱えて、机につっぷした。山元先輩がその様子を見てにやにやと笑う。
「それじゃあますます惜しかったねえ、大河内先輩がいなくて。その青田さんて子も吹奏楽部なんでしょ？　見てほしかったわ、奇跡の共演」

「まったく、こんな時に何やってんだか、あいつは」
「大河内先輩は今日は吹奏楽部じゃなくて、バンドの方の練習らしいですよ」
　同じく意味深な笑みを浮かべる高取先輩に、藤江先輩が律儀に伝える。
「石上先輩はディベート部。樋野くんのところの演劇部も、今日は役員会議みたいです」
「あー！　もう、先輩方も何なんですか！　他人ごとだと思って……」
「失礼しまーす！」
　立花くんが机から顔を上げて叫ぶのと同時に、部室の後ろのドアが開いて青田さんの明るい声が響き渡った。
　手をふり上げんばかりだった立花くんの顔が、みるみる青ざめていく。その様子に、わたしも思わず、あ、これは確かに面白いかも、と心の中で呟いてしまった。

三

　中学生の最後の夏から、お父さんから『緑の雪』を受け取るまでの記憶は、彼がわたしに呼びかける、残酷なほど優しい声だけだ。
「冬葉、ぼくは、葬式を出すことに決めたよ」
「冬葉、ごはん、食べないのかい」
「冬葉、どうかゆっくり休んで」
「冬葉、着替えられるかい」
「冬葉、外に散歩に行こう」
「冬葉、寒くはないかい」
「冬葉、もう学校へなんか行かなくていい」
「冬葉、ぼくはもう、君がいればそれでいい」
「冬葉……」

「冬葉、君に渡したいものがある」
　ある冬の日、お父さんが布団に横たわるわたしに『緑の雪』を差し出して言った。
「春子が残してくれたものだ。冬葉に見せるのは酷かもしれないと思っていたが、気が変わった。これは君に預けよう」
　わたしは起き上がって『緑の雪』を手に取り、そして見た。――すると、一瞬にしてすべての空間がその一点に集中し、極限まで圧縮されたところでまた散り散りに広がっていくようにして、わたしのまわりの世界は急激に色彩を取り戻していった。わたしは震える手で、確かめるように自分の顔をなぞった。それから顔を上げて初めて、お父さんの顔を見る。痩せたわけでもなく、髪がのびたわけでもないが、以前とはまったく別人のような容貌をしている気がした。
　何が悲しいのか、何が苦しいのかもわからないままにわたしは『緑の雪』を抱き、そしてからだを内側から押し広げるように口を開いて嗚咽した。いままでの分を償う涙が、堰を切って流れていく。お父さんは、抱きしめることもなぐさめることもしなかった。ただ枕元に立って、わたしの声にならない叫びを聞いていた。
　永遠とも思われるような長い、長い数分間が経って、やっとわたしが落ち着いたころ、お父さんはまるでその時間が始めからなかったかのように、淡々と言葉を継いだ。
「それと、もうひとつ。……東京で住む部屋に目処がついた。今度の春にはそっちへ引っ越す。君が行きたいなら、向こうの高校も好きなところを受けるといい」
　腫れた顔であらためてお父さんを見上げると、その背後から差す朝日の眩しさに思わず目を細めた。冷たく、それでいて春を予感させる優しい日差し。
「ぼくは、もう何も言わない。すべては冬葉しだいだ」

そうして十五年間でいちばん長い冬は、終わりを告げた。

「お、お父さん！」
「やあ冬葉。体操服もポニーテールも似合ってるよ」
「『似合ってるよ』、じゃないでしょ？　何でお父さんがここにいるの」
「何でも何も、娘の勇姿を見に来たのさ」
「鹿野さんのお父さんですか？　おはようございますー」
　体育祭の準備の途中、わたしの反応に目をつけた大河内先輩が間髪入れずにお父さんの前に顔を出したので、わたしは思わず頭を抱えた。
「どうも、おはようございます。娘がお世話になってます」
「いえいえ、俺は写真部でちょっとご一緒しているだけで。いまその顧問を呼んできますね」
　お父さんと写真部員の接触を許してしまうという失態に打ちひしがれている隙に、先輩が樫井先生を呼びに駆け出していってしまう。
「ちょ、ちょっと先輩」
「樫井先生ー！　鹿野さんのお父さんが来られてますよー！」
　少し遠くの方に、カメラを胸に下げて立っていた先生が先輩の大声で振り向き、こちらにやって来た。それにつられ、周りにいた写真部員たちもぞろぞろとやって来て、あっという間にお父さんを囲んでしまう。
「ほう、あなたが樫井先生ですか」
「はっ、はい。どうも、いつも娘さんにお世話になっております。本日は体育祭日和で……」
「先生、立場が逆、逆」と先輩たちに小突かれる樫井先生は、かつての詩人、鹿野夏槻であるお父さんを前になぜかかなり緊張しているようだ。そして、そんな先生をしげしげと眺めるお父さん。わたしはその間、お父さんが変なことを口走って先生を困らせはしないかと、不安で冷や汗が止まらなかった。
　ややあって、視線を先生の顔に戻して目をじっと見つめると、お父さんはうっとりとしてささやいた。
「……なるほど。あなたが女性だったら、また話は違っていたかもしれないね」
「ちょっと！　お父さん！」
　――必死の制止もむなしく、樫井先生を含むその場にいた全員が、狐につままれたような顔になる。
　わたしは顔から火が出そうになるのをこらえながら、半ば強制的にお父さんを観覧席に引っ張っていった。

「立花くん、大丈夫？」
　わたしは、体育祭実行委員会の仕事や、陸上部だからと押し付けられた数々の競技の出場

で、会場中を走り回っている立花くんに思わず声をかけた。「ああ、大丈夫」と返しはするものの、いつも写真部でしか見せない不機嫌な表情になりかけているあたり、かなり疲れているようだ。
「それより、大縄跳びの企画はうまくいってるのか？　昨日は演劇部やら美術部の連中とずいぶん遅くまで残ってたみたいだけど」
「えへへ。準備は完璧だよ。先輩たちにもたくさん協力してもらったし。だからもう、うちのクラスのパフォーマンスというより、すっごい大規模なプロジェクトになっちゃったんだけどね。後は、風がうまく吹いてくれればいいけど」
「……はあ。それよりも、まず先公どもがぎゃあぎゃあ騒がないかどうかだな」
　立花くんは眉間に指を置いて言った。心労をうかがわせるその動作に、さすがのわたしも罪悪感にかられる。
「ご、ごめん。ただでさえ忙しいのに、余計な心配増やしちゃって」
「へえ、無神経の鹿野には珍しく気をつかってくれるんだな」
　口の端を片方上げて、立花くんは笑う。案の定、いつも以上に毒舌をふるう彼は相当に機嫌が悪い。
「だ、だって……」
「別に、いまさら仕事のひとつやふたつ増えたところでどうってことねえよ。クラスのやつらにいやいや合わせてるよりかは、こっちの方がずっといい」
「それはそうだけど」と口ごもりながら、わたしはクラスの女子の惨状を思って少し頭が痛くなった。青田さんはいつもの調子で内輪だけの盛り上がりの中心にいるし、荻生さんに至っては、とうとう体育祭を欠席してしまった。樫井先生や他の部員たちのように特に割り当てられた仕事もないわたしは、その殺伐とした空気の中でじっと、ひとりで過ごしているしかないのだった。
　――しかし、わたしは自分が唯一関わり、提案した計画にはとても期待していた。もしこれが成功すればわたしは『緑の雪』に限りなく近づくことができる。それを思うと、楽しみでたまらなかった。
　そしてそれを、樫井先生に見てもらえたなら、わたしは……。
　――と、その時、石上先輩が実行委員会の本部から早足で歩いてくるのが見えた。何やらただならぬ雰囲気を発している。わたしたちふたりを、遠くから呼んでいるようだ。
「立花くん、鹿野さん、ちょっと……」

「何だ何だ、今度は何の騒ぎ？」
　再び写真部員たちが集まっているのを見て、また問題を起こしたのかと心配したらしい樫井先生がこちらに走ってきた。わたしはこんな小さなことで泣いているのを先生に知られるのが恥ずかしくて、必死に涙を拭おうとしたが、えも言われぬ悲しみにひたされた顔までは隠すことはできなかった。
「鹿野……」

　どうしたの、と言いかけた先生に、横に立っていた石上先輩がこれまでの経緯をそっと伝えた。
「……え？　一切禁止？　そんなの俺も聞いてないよ」
「もうすぐ全体放送で流れるとは思いますが……。実は朝の時点で、仮装して登校したり過剰に小道具を持ち込んだりというのに、何人かの先生から不安の声が上がっていたみたいです。それで、上層部だけで話が進められたあげくに、実行委員会にお達しが」
「そういうのが醍醐味なんじゃないか。問題起こされるのが嫌なら前から言っときゃいいのに、何をいまさら……抑止力も何もないだろ」
　応援合戦の衣装の学ランを着た高取先輩が腕を組み、いつになく険しい表情で言う。
「ほら、負けたわけじゃあるまいし、そう気を落とすなよ。鹿野らしくない」
　樋野先輩の励ましに鼻声で「はい」と答えたものの、わたしの中で複雑に絡み合っている感情を抑えるのは、なかなか難しかった。自分の思い通りにうまくことが運ばない、ただそれだけに悲しみを覚えている自分すら、はがゆくて仕方がなかった。――いったいわたしは、この計画に何を望んでいたというのだろう？
「鹿野」
　すると、いままで黙って一部始終を見ていた立花くんが、急に口を開いた。
「計画は決行しよう。責任は俺がとる」
「え？」
　その場にいた全員が、驚いて立花くんを見る。――彼は、至って真剣な顔をしていた。
「いや、そういうわけにはいかないよ」樫井先生が落ち着いた様子で言う。
「どうせやるんだったら、俺が顧問の権限でゴーサインを出す」
「これは元々クラス単位の企画だったんですよ？　Ａ組の級長で、かつ実行委員会にも関わってる俺が最後まで背負うべきです」
「だからこそ、だよ。せっかく一年生が頑張ってやってんだ。俺は立花にみすみす信用を落としてほしくない。優秀な実行委員の不履行よりも、元から奔放な顧問の監督不行き届き、って方が丸くおさまるだろ？」
　先生の説得に、立花くんは「でも……」と口ごもった。
「どうしたの、立花くん。そんなにむきになるなんて、それこそらしくないよ」
　堪えかねた石上先輩が口をはさむ。まったくその通りだ、とわたしは思った。写真部では本音が出るとはいえ、立花くんは高校一年生とは思えないくらい、常に冷静な判断を欠かすことをしないのに。
「大丈夫、波風立てないように何とかおさめるよ」立花くんよりも幼く見える笑顔で、先生は言った。「だからお前たちは、のびのびと楽しんでればそれでいいんだ。な？」
　立花くんは心なしかうつむきかげんになって、低い声で小さく「はい」と答えた。

　見覚えのある姿をひとの群れの中に見かけ、お父さん、と呼びそうになって、止めた。ちがう。あれは夏槻さんだ。よく似ているけれど、ちがう。真っ黒なスーツというこの場にふさわ

しからぬ服装が、その証拠だ。
　突き抜けるような五月の空。そして、グラウンドに舞う雪。その中に立ち尽くすわたしたちは、静かに見つめ合った。どこからか薫る夏の風の匂いが、感覚を表現する力をわたしから失わせる。言葉ではないものでつながっているわたしたちは、永遠に話すことはないはずだった。それなのに――
　夏槻さんが、わたしに何かを伝えようとしている。声は聞き取れない。ただ、唇を動かしていることはわかる。何？　何て言っているの？　――わたしは知りたくもあり、知ることをおそれてもいた。耳を塞ぎ、同時に耳を澄ませていたいような気分になった。
　それはもしかすると、世界を滅ぼす魔法の言葉なのかもしれないと思ったからだ。

「夏槻さん……」
「白団の、勝利を願ってー！」
　わたしが虚空に向かって手をのばした時、高取先輩の大声が響き渡った。我に返ると、そこはもうわたしのクラスの、大縄跳びの列の中だった。
「一年Ａ組、ファイトー！」
　生徒席から太鼓の音と一緒に飛んでくる地鳴りのような応援団の声と、校舎の最上階から降ってくる大量の紙吹雪に騒然とする会場。その、普段の学校とは切り離された異様な場所で、わたしと青田さん、それに縄を回す役の立花くんはそっと目配せをした。
　ああ、いまお父さんとお母さん、そして夏槻さんがわたしを見てくれている。だからわたしは、大丈夫。
「いっせーのーでっ」
　立花くんのかけ声とともに、白い紙が躍る空中を切って縄が舞った。

『おっと！　赤団の走者が転倒！　また転倒です！』
　最終種目のリレーで幾度目かのアクシデントに、実況をしている放送部員がますます声に熱をこめた。グラウンドに降り積もった紙吹雪に足をとられるせいか、思わぬところで転ぶ選手が後を絶たないのだ。
「あっちゃー、またか。こりゃあ、後でこっぴどくしぼられそうだなあ」
　女子リレーでの出番を終えて生徒席に戻ってきた山元先輩が、トラックの方を振り返って言った。
「す、すみません。先輩方にもご迷惑おかけしてしまって」
「いいっていいって。何だかんだ言ってみんな、面白いことは怒られてでもやらなきゃ気がすまないんだから」
「でも結局、Ａ組の跳んだ回数は最下位でしたし……」
「これから挽回するんじゃない。ほら、もうすぐ立花くんが走るよ。応援しないと」
　先輩の指す方を見ると、立花くんが前の走者を待ってスタートラインに並んでいた。いまのところ白団の順位はトップ。この調子でいけば、そのまま立花くんにバトンが渡りそうだ。

――しかしもうひとり、その延長線上にバトンを持って立っている顔見知りの人物がいた。
「……か」
　驚きのあまり、わたしはそこで一度息を呑んだ。
「樫井先生！」
「ああ、今年も乱入教師リレーやるのかー。あの様子だと、トップ通過のチームと一緒にスタートするつもりだな」
「それじゃあ、わざわざ立花くんと一騎打ちするってことですか？　無謀というか、何というか……」
「ふふ。まあ、見ててよ」
　山元先輩がそう言い終わるかどうかという時に、立花くんが助走を開始し、樫井先生がスタートした。
　予想通り、現役スプリンターの立花くんは無駄のない動作でバトンを受け取ると、圧倒的な速さでからだひとつ分リードした。しかし、意外なことに先生も、それから突き放されることなく食い下がっている。普段の穏やかな姿からは想像できない、力強い走りだ。
「うーん、こういう時はどっちを応援すればいいのやら。がんばれー！」
　先輩が声を張り上げる一方で、わたしはひとつも言葉を発することができなかった。どうしようもなく流れ込んでくる既視感に、なす術がなかったのだ。その間にも、ふたりは並んだままトラックを半周し、いまだ白熱したレースを繰り広げている。
「あっ」
　次の走者が待ち構える少し手前で立花くんが転ぶところを目撃し、やっと口が開いた。ほんの一瞬のことだった。先生はそのまま立花くんを追い抜き、トップが交代したところでバトンを次の先生に渡した。
　放送席はもちろん、会場全体が沸き立った。先生は勢い余って地面に転がり込み、紙片と砂ぼこりを浴びながらもすぐに立ち上がってガッツポーズをした。
　それと同時に、強い目まいがわたしを襲う。――これは現実？　それとも夢？　懐かしいお母さんの声が、こだまするように頭に響き渡る。
――またわたしの勝ち。遅いよ、冬ちゃん！
　だめだよ、お母さん。わたしはお母さんみたいに速くは走れないんだよ。
――やっぱり、まだ冬ちゃんにはわたしがいないとだめね。
　勝ち逃げなんてそんなのずるい。ずるいよ、お母さん……。

Please don’t flow so fast

　寒さを理由に外出をしぶる彼をどうにか連れ出して家を発つと、町に降る雪はさらにその激しさを増していた。
「あ、あそこ。あの子がよく遊んでいたブランコじゃないか？　雪に埋もれててよくわからないけど」
　彼は、まっさらな平原のように見える公園の中を指差して言った。わたしは手をかざしてそちらを凝視する。見渡す限りが白で覆い尽くされている中では、意識を集中させるだけでも精いっぱいだ。
「……そうかしら。わたしにはよく見えないわ」
「行ってみればわかるよ」彼はわたしたちが踏み固めてきた道をそれ、その敷地へ踏み込んでいこうとする。「どうにかして掘り起こして……」
「夏槻さん」
「何だい」
「……あの子に会うのが、そんなに嫌？」
　彼は急に立ち止まり、わたしに背中を見せたまま黙りこくった。雪面の上を走る風が、吹雪となって容赦なく顔に叩きつけられる。その寒さのせいか、黒いコートに包まれた後ろ姿は微かに震えているような気がした。
　そんな風の唸り声すら雪に絡めとられていく中で、彼の言葉はわたしを包み込むように優しく響いた。
「どうか、あの子から『緑の雪』を奪わないでほしい」
「それは……」
「あれはあの子のすべてだ」彼は振り返ってわたしの目を真っ直ぐに見た。「そして、ぼくのすべてだ」
　その光に飢えた瞳にとらえられて、わたしは言葉を失った。
「あの子の世界は、あまりにも儚くついえてしまうもの……だからこそ、君もたったひとつの希望として、あれを託したんだろう？」
　ちがう。ちがうの、と言う代わりに、わたしは静かに首を横に振った。あなたが思っているよりも、わたしたちは強い。それをわたしの手で証明できなかったことが、何よりも悲しいけれど。でも……。
　涙をこらえてしばらく立ち尽くした後、後ろめたさを振り切るようにして、わたしは唐突に路地の外に向かって走り出した。
「おい。待ってくれ」
　後ろで戸惑う声がするのにも構わず、わたしはからだ中の力をふりしぼって柔らかい雪の上を駆け抜ける。目指すは、ケヤキの木。線路沿いに立つ大きな木だ。

　徐々に速度を落としてケヤキの幹にそっと触れると、わたしは後ろを振り返り、足にまとわりつく雪に苦労しながら追ってくる彼を待った。
「はあ、いきなり走り出すから、驚いたよ……。どうやったらこんなところで平気な顔して走れるんだい」
　彼はやっと木の下に辿り着くと、膝に手をつきながらそう尋ねた。
「あら。だって、わたしたちは雪女だもの」
　わたしはにっこりと微笑んで言った。
「……わたし、たち？」
　彼は怪訝そうに首を傾げた。
「そう、みんなわたしの予想通りだったの。ほら、見て」
　後方を真っ直ぐ指差して彼の視線をそちらへ向けると、わたしはしなだれたケヤキの枝を激しく揺らし、積もった雪を振り落とした。木全体を覆っていた細かな粒子が一斉に風に舞って散り、やがて周囲の様相が明らかになる。
　そこに現れたのは、青々と茂るケヤキの葉と、ちょうど木を挟んでわたしたちの反対側に立つ、夏服のセーラーを着たわたしとそっくりの女の子だった。

　親御さんに聞いたんだが、荻生のここ数日の欠席は、どうも登校拒否らしい。鹿野、本当に何も知らないんだな？」
「はい」
　ああ、早く終わらないかなと、継ぎ目なく話を続ける木下先生の目を見つめながら返事をする。
「……ならいいんだがな、鹿野。それを差し引いても、お前の行動は少々目に余るんだよ。遅刻はする、授業放棄はする。そのくせ、部活だけは規定の下校時刻を過ぎても立派にやってる……。中間試験の成績は見たな？　俺は、それが当然の結果だと思えてならないんだが」
「はい」
　大丈夫です。わたしは、先生の話を真摯に受け止めています。視線をそらさずにじっとしていることで、わたしはそれを必死に伝えようとする。いますぐにでもこの話を切り上げて、樫井先生のところへ行くために。
「いや、別に部活に打ち込むのはいいことだし、写真部が悪いと言っているわけじゃない。だけどな、立花を見てみろ、鹿野。そこで好き勝手やることが許されるのは、普段の学校生活で最低限のルールを守って出した成果があってこそなんだ。……お前は、そのために何か努力をしたか？　このままだと、部活動の停止もやむを得なくなるぞ。わかってるのか？」
「はい」
　何て狭い了見。何て窮屈。そっちこそわかっているの？　わたしが雪女だってこと。
　これ以上わたしを邪魔するのなら、凍らせて……。
「ならいい。いま俺が話したこと、全部肝に銘じておくんだぞ」
「はい」
　やった、やっと終わった！　わたしは話が終わるきざしが見えて一気に解放された気分になり、心の底からにっこりと笑った。
　しかしその一方で、木下先生はあっけにとられたような顔になり、やがてだんだん眉間に皺を寄せていって、言った。
「……鹿野！　お前、全然俺の話を聞いてなかっただろう！」

　結局、その日の昼休みは弁当を食べる時間まで失ってしまい、今度こそ早く樫井先生に会いにいこうと、わたしは放課後すぐに席を立った。しかし――
「ちょっと、鹿野さん」
　今度は、青田さんを取り巻く女の子たち数人に、行く手を阻まれた。
「何？」
　わたしは首を傾げ、なるべく穏やかな口調で尋ねる。

「鹿野さんてさ、樫井先生と立花くん、どっちが好きなわけ？」
……はあ？　と声に出しそうになるのをぐっと堪える。どうして、そんなことを普段ろくに話さない子たちから聞かれなければならないのだろう。
わたしは彼女たちに聞こえないように、小さく息をついてから、言った。
「そんな……好きとか、全然そんなのじゃないよ。ふたりとも同じ写真部だから、たまたま話す機会が多いだけで……」
「でもさ、鹿野さんって、部活の時以外でもしょっちゅう樫井先生とふたりきりで話してるじゃん」
「そうそう。現代文の授業とかでもさ、鹿野さんいつも嬉しそうににこにこしてるし。他の授業では、だいたい寝てるかサボるかしてるのにさあ」
「ねー」「あからさまだよねー」と一方的に自分たちで頷き合う女の子たちと、底が浅くて意味の深い、くすくすという笑い。この子たちはいったい何が言いたいの？　と、わたしも徐々に苛立ちを隠せなくなってきた。
「仮に、わたしが誰かに恋愛感情を抱いてたとして」鋭い声色でわたしは言った。「そんなのどうでもいいことじゃない？　何があなたたちに関係あるの？」
すると、さすがに相手もむっとした表情になって、腹の底の本音らしきものをぶつけてくる。
「だからあ、写真部だからってあんまり色んなひとにいい顔しないで、って言いたいの」
「その気がないならなおさらだよ。もうちょっと立場わきまえて立花くんに接してよ。そのひとをすきな女の子の気持ちとか、あんた考えてんの？」
――その言葉に、わたしは一瞬にして体育祭以降ぱったりと話しかけてこなくなった、青田さんの顔を思い浮かべた。
ああ、そういうことか。この場にいない自分たちの仲間を守るために、いま彼女たちはわたしを牽制しようとしているわけか。体育祭の一件で、青田さんがわたしではなく同じ部の立花くんの素顔に興味を持って近づいてきていることはよくわかった。だからこそ、わたしは写真部のひとたちとは至って素直に接していたつもりだが、どうもそれが裏目に出て、中学校からの立花くんと青田さんの仲を応援したがっているこの子たちの気に触ったらしい。
「考えてない」
わたしはきっぱりと言い放った。
「はあ？」
「そんなの考えてないし、当事者じゃないひとたちがこうやってごちゃごちゃ話をする必要もわかんない。……あたし、部活が忙しいからもう行くね」
机と椅子がぶつかるがたんという音を立てて、わたしは逃げるように教室を去った。「おい待てよ」という彼女たちの鬼気迫る声が聞こえる。……わたしは決して、あなたたちが期待しているようなことはしない。決して。そう心の中で言い返す。
――なぜならわたしは、誇り高き雪女だから。
後ろの方で、わたしの居場所がまたひとつ喪失していくのを感じながら、わたしはそれを

振り切るように、樫井先生が待つ部室へと走っていった。

　水曜日はほとんどが、わたし以外の部員たちがみんな他の部で活動していて樫井先生とふたりきりになる日だ。
　わたしは部室の前に辿り着くと乱れた息を整え、ゆっくり深呼吸をしてから、意を決するように「こんにちは」と声を発しながらドアを開けた。すると、いつものように「こんにちは」と穏やかな声が返ってくる。――中には、黒いエレキギターを抱えて弾いている樫井先生がいた。
「……びっくりした。一瞬誰かと思いましたよ」わたしは、初めて見るその姿に意表をつかれながらも、つとめて普段通りに先生に話しかけた。「先生って、ギターもお弾きになるんですね」
「うん、これもちょっと趣味でね。そううまくもないんだけど、今度大河内のバンドにサポートとして入らなくちゃならなくなってさ」
　アンプに繋いでいないギターの弦は、かちゃかちゃと金属の音を部室に響かせる。先生はずいぶん練習に集中しているようなので、その音が途切れるのを待ってから、わたしはそっと声をかけた。
「……あの、先生。わたし、先生にお見せしたいものがあるんです」
「ん？　何かな」
　先生が顔を上げ、足を組みかえてギターを下ろすのを確かめると、わたしは少しだけうつむいてバッグから手帳を出し、それに挟まっている『緑の雪』を――一枚の写真を取り出して、先生に手渡した。
「これは……」
　先生はその小さな写真を丁寧に受け取ると、顔に近づけてじっと見た。
「わたしの宝ものです」
　それは、葉を茂らせたケヤキと夏服のセーラーを着ているわたしの後ろ姿、そして、そこに雪らしきものが舞っているところをとらえた写真だった。
「これは、加工なの？　それとも……」
　先生は、写真に視線を集中させたまま首をひねった。
「わかりません。それはわたしの母が去年の夏に撮ったものですが、わたしがこの写真のことを知ったのは冬が終わるころですから、その間に母か父が何らかの細工をした可能性はあります。でも同時に……」
「本物の可能性もある？」
「ええ」
　先生は「うーん」と唸って目をつむり、あらためて『緑の雪』を眺めた。
「俺が見る限り、これに写ってる女の子は鹿野にしか見えないんだけど……。でも、だとしたら、本当にその時雪が降ったかどうかっていうのは、鹿野自身が覚えてるはずじゃないのかな」

　わたしは、先生の目を見すえながらかぶりをふった。
「それが、覚えていないんです。ショックで。……この写真を撮った後すぐに、母が行方不明になりましたから」
　ここまで言ったところで、話されていることの重大さに気がついたらしい先生から声が消えた。
「前に、わたしが母に雪女の娘として育てられた、という話はしましたよね？」
　わたしの確認に、先生は黙ったままゆっくりと頷く。わたしはそれを見て、少しでも安心させようとそっと微笑んだ。
　――そしてわたしは、ひとつひとつ記憶のページをめくるように、わたしのすべてを話し始めた。
「……実際にわたしは、昔から言葉で説明できないもの、幻覚のようなものをよく感じる子どもではあったんです。特に、小学校に入る前は。いきなり叫び出す、といったようなこともしょっちゅうでした。周りのひとはみんな、そういったわたしがきれいだと思うものもこわいと思うものも、何ひとつ理解してくれなかったんです。わたしはそのことで、常に世界に対して不機嫌でした。
　でも、母はちがいました。不可解なことをひとつひとつ言葉にして、あるいはそれが書かれた本を与えて説明してくれました。……その教えのひとつが、わたしたちがこの世界で生きづらいのは、氷の世界からやって来た雪女の血が流れているからだということでした。
　わたしは、何も疑うことなくそれを信じました。さもなければ、自分がこの世界で限りなく異質な存在に思われたことの説明がつかなかったからです。
　それに、雪女の母は小学校の教師でもありました。一時期はわたしの通っていた学校にも勤めていたので、わたしは母の人脈に守られてとても快適に過ごすことができました。母自身が雪女だと公言していたので、その娘としてのわたしも冗談ととられることはあれ否定されることはなかったんです。
　けれど、中学校に上がってから状況は一変しました。……当たり前ですよね。以前からの知り合いですら冗談としか思えないのに、普通の中学生は自分が雪女だと信じているひとなんて、頭がおかしいと思うに決まってますから。
　それでも、どんな目にあってもわたしは母とともに培ってきた雪女としての自分を、捨てるつもりはありませんでした。わたしに協調性を強要し苦しめようとするひとたちは、凍ってしまえばいいとすら思っていました。わたしの心の支えは、母が雪女としてのわたしを肯定し、自身も雪女として楽しそうに生きていること、ただそれだけでした。でも……」
　わたしの声は震え始めていた。声にすることがみな、当時の感覚とともに蘇ってくるようでおそろしかったのだ。それはまぎれもない現実だと、お前はそれを受け止めねばならぬと言われているようで。先生はその間、沈痛な面持ちでわたしが言葉を区切るたびにうん、 うん、と頷いていた。
　わたしは息を吸い込んだ。
「その写真を撮った日、母は忽然と姿を消しました。何の前触れもなく、ただ母という存在

だけがぽっかりと抜け落ちてしまったみたいに。唯一見つかったのは、その『緑の雪』が収められ、母の実家よりもずっと高い山の上で神さまに捧げられるように置かれていた、母のカメラだけでした。
　わたしは、その最後の母との会話から、父からその写真を受け取るまでの間ほとんど記憶がありません。 父が言うには、学校にも行っていなかったようです。ほとんど半分、死んでいたような生活でした。きっと、母が突然いなくなって、その母に雪女として育まれた自分まで永遠に失ってしまったかのような状態になっていたのだと思います。
　冬の終わりに初めてその『緑の雪』を見た時に、わたしはひとまず自分を取り戻しました。母は、本当にわたしたちは夏に雪を降らせることができるのかもしれない、という可能性だけは残しておいてくれたことがわかったからです。ただ、あの夏から時が止まってしまっただけで……わたしが置き去りにしてしまっただけで、雪女のわたしはちゃんと生きているのだと。
　でも、同時に思い知りました。この現実で、『いま、ここ』でわたしがちゃんと生きて行くためには、母という人間が必要不可欠だったんです。母がいなければ、わたしは学校にも、社会にも受け入れてもらえない。だから」
　もう、わたしの顔はどうしようもなく歪んでいたかもしれない。しかし、だからこそわたしは救いを求めるように、先生に向かって笑いかけるしかなかった。
「先生が、母の代わりになってくださいませんか」
「鹿野、それは」ようやく口を開いた先生は、いつもより低い声でそう尋ねた。
「どういうこと？」
「ふふ。いままで申し上げませんでしたけど、先生は何もかもがわたしの母にそっくりなんですよ。教師をしている、というのはもちろんですけど、自分も生徒みたいにわたしたちに接してくれるところも、いつもひとに囲まれて楽しそうにしているところも、わたしの父が書く本がすきなところも、足が速いところも……。 わたしはそんな先生がいっしょにいてくれることで、自分のすべてを肯定して生きていけそうな気がする。……いえ、先生がいないと、わたしはもうだめなんで す。
　だから、ね、先生。これからもずっと、わたしのそばにいてくださいませんか。いままで通りでいいんです。先生もお忙しいでしょうから、時々わたしと、写真部や読んだ本のことなんかについてお話ししましょう。先生さえよろしければ、わたしの家にも遊びに来てくださってもかまわないんですよ。父も、きっと喜びます。そうしたら、先生と、父と、わたしで、みんな昔のままに……」
「鹿野！」
　後ろの方から大声がして、わたしは驚いて振り返った。
　――そこには、部室の扉の前に立っている、立花くんの姿があった。
「た、立花くん」わたしはうろたえた。「いつからそこに……」
「馬鹿か、お前」
　いつになく激しく浴びせられる声に、わたしはびくりと肩を震わせた。
「こいつは……先生は男なんだぞ？　それなのに『母の代わり』とか……ふざけんなよ。

お前、自分がどういうこと言ってるか、わかってんのか？」
　その言葉に責め立てられるように「あ、あ」と言葉にならない声を出しながら、わたしはおそるおそる先生の方を見た。
　すると、先生は「立花、言いすぎだ」と彼をたしなめ、それでも重く真剣なまなざしを失うことなく、わたしの方を向いて言った。
「でも、正直同感するところがあるのは俺も否定できないよ、鹿野。……悪いけど、鹿野が言ってることは、俺には受けられない」
　世界が反転し、わたしがいま立っているこの床が、音を立ててがらがらと崩れ落ちていく。
「ごめん、理由は言えない。でも、どうしても俺には無理なんだ。その役目を受けるのは……」

　そうして、わたしはまた鹿野冬葉を失った。

外は雨だ。音がするわけでも、匂いがするわけでもない。ただ、雨の気配をからだの表面で感じる。それだけだ。
「冬葉、学校は行かなくていいのかい」
お父さんが、優しい声でそう尋ねるので、わたしは軽く頷いた。お父さんは「そうか」と言って、それ以上何も聞くこともなく台所に紅茶を淹れにいった。わたしはソファーに腰かけたまま、黙々と本の続きを読む。
時々手をとめて、『緑の雪』を手に取って眺めるが、夏槻さんの姿はまったくみえてこない。その画すら、わたしにとって意味のない、記号のようなものにしかみえない。自分は雪女だと信じていた、愚かな愚かな女の子。――それがひとつの物語だとしたら、いままでわたしが読んできたどんな本よりも取るに足らないものだ。
そこまで思い至ったところでわたしは思考を止め、また本の世界の中へと戻った。こちらの方がいまのわたしにはずっと有益なのだと、そう確かめるように。
しばらくするとお父さんがふたり分の紅茶を持って戻り、わたしの隣に座った。
「ティプトリーか。最近は海外ＳＦが多いね」
「うん」わたしはマグカップを受け取って言った。「この際だから、家にある文庫をひと通り読んでおこうと思って」
「それはいい。冬葉は、この年にしては珍しい読書家だな」と微笑んで、お父さんはわたしの頭をそっと撫でた。何も責めず、決してわたしの意志を妨げない、優しい優しいお父さん。ここはまるで楽園のようだ。甘い蜜のように、ゆっくりと温くわたしを包む。
――生きている気がしない。
「……さて。名残惜しいが、ぼくはそろそろ仕事に行かなくちゃ」
マグカップを傾けて紅茶を飲み干すと、お父さんはすっと立ち上がった。
「それじゃ、元気で待っててな。冬葉」
そしてもう一度わたしの頭を撫で、顔を近づけようとしたが、さすがにためらいを覚えたのかすぐに手を離した。
「うん。行ってらっしゃい、お父さん」
わたしがそう言うとお父さんは、今度は少し悲しそうに笑いながら、「行ってきます」と残して部屋を出て行った。

わたしは家の中で洗濯や掃除、その他の家事をする以外は、ずっと本を読んで過ごしていた。一日に二三冊、多い時は四冊読むような生活だった。そのおかげで、わたしは家にある蔵書をどんどん読み尽くしていった。お父さんとお母さんの思考がかたちづくった何年にもわたる軌跡を、ほんの数日でたどっているようなものだった。
そして時々、読書に疲れた時はお母さんとのかつての会話をぼんやりと思い出した。
――ねえ冬ちゃん。冬ちゃんは、「夏槻さん」に会ったことはある？

――ううん、しらない。そのひと、だれ？
――たまにしか会うことができないけれど、わたしたち雪女にとってとても、とても大切なひとよ。冬ちゃんもきっと、もうすぐ会えるようになるわ。
　そう、お母さんがこの話をしてくれたのは、わたしが初めて夏槻さんに出会う前のことだった。だから、わたしはひと目みた時から、このひとが「なつきさん」だ、と確信することができたのだ。
――お母さん、冬葉もなつきさんに会ったよ！
――本当？　それはすごいわ！　小学生で会えることができるなんて、冬ちゃんはとてもラッキーだよ。
――でも……あたしずうっとなつきさんのことみてたのに、一回も話しかけてくれなかったよ。嫌われてるんじゃないのかなあ。
――あら。気にすることないよ。お母さんだって何回も夏槻さんも会ってるけど、話したことは一回もないもん。
――ええ、お母さんでも？　どうして？
――普通のひとと比べたらね、姿がみえるだけでもすごいことなんだよ。だから、実際にお話ししたらどうなるかっていうのは、わたしたち雪女にもまだわからないんだ。
　わたしが夏槻さんと言葉を交わすことに焦がれると同時に、おそれてもいるのは、お母さんのこの教えがあったからだ。そしてわたしは、あまり夏槻さんに近づきすぎると世界が壊れてしまう――そんな予感を抱いていた。なぜだろう？
――ねえ、お母さん。なつきさんの「なつき」って、もしかしてお父さんのペンネームの「夏槻」と同じなの？
――ああ、そっか。冬ちゃんには口でしか教えたことなかったもんね。うーん、厳密には違うんだよ。お父さんが詩をつくる時は、夏槻さんが使う言葉を想像して書いているから、名前だけを借りているの。だから、字は同じなんだよ。夏の槻(けやき)と書いて、夏槻。
――普通の「樹」じゃなくて、「槻」なんだね。
―― そうだよ。……ここだけの話、「夏槻」っていうのはわたしが考えた名前なの。ほら、冬ちゃんともよく行く散歩道の途中に、おっきなケヤキの木があるでしょ？　夏になると広い日陰になるから、よく下で休んでるあの木。わたしがまだ子どもで、夏槻さんに名前がなかったころからよく似てるなって思ってたか ら、そうつけたの。冬ちゃんの「冬葉」も、ケヤキの葉をイメージしてつけたんだよ。
――え？　冬葉も？
――うん。ケヤキに茂るあのきれいな緑の葉っぱ。それが冬ちゃんだとしたら、木そのものである夏槻さんは冬葉の運命。ふたつは、葉が朽ちて地面に落ちた時にしかひとつになれない。でも、いまも確かにつながっているの。
――ま、待って、お母さん。もし冬葉がケヤキの葉っぱだったら、それこそ冬には枯れて落ちちゃうんじゃないの？
――ううん。枯れないわ。雪にさらされても枯れない。いつまでもみずみずしく、うつくしい

葉のまま。冬葉、わたしはあなたにそうあってほしいと願って、そう名づけたんだから……。
　ああ、そうだ。お母さんはきっと、朽ちてしまった葉っぱなんだ、とわたしは思った。雪女の力をわたしの前で使ってしまったから、この世界にいられなくなったんだ。だとすれば、お母さんの望み通り、わたしが夏槻さんと接触してもなお生き続けていられれば、あるいは――
　その瞬間、世界が大きく揺らぎ、わたしは激しい眩暈を覚えてソファーに倒れこんだ。そして、からだが思うように動かせないのを自覚して、初めて気づく。いけない。今日は、朝から何も食べていないんだった。何か、何か口に入れなければ……。
　――そう思ったころには、ついさっきまで考えていた言葉は、もう何も意味のないものになっていた。

　いつものように、撮影に出かけているお父さんを待って家で留守番をしている時、家に電話がかかってきた。
　わたしはおそるおそる、着信音が鳴る電話機をのぞいた。担任の木下先生からの電話は、すでにお父さんが応対してうまく言い訳をしてくれたはずなのだが。
　ディスプレイを見ると、どうやら知らない携帯の番号からかかってきているようだ。お父さんの仕事に関係する電話だといけないと思い、わたしは反射的に受話器を取った。
「はい。鹿野です」
「もしもし。立花です」
　わたしは思わず息を呑んだ。
「……おい待て、切るな、鹿野！」わたしの沈黙から何かを察したのか、立花くんはあわてて用件を述べた。「俺、どうしても鹿野に謝りたくて木下に電話番号聞いたんだ。鹿野、携帯持ってないから……。頼む、何も言わなくていいから話だけでも聞いてくれ」
　わたしはどうしていいかわからないまま、何の反応を示すこともできずただ受話器にしがみついているしかなかった。
「俺、 悪いとは思ったけど樫井先生から鹿野の話全部聞いたよ。よく知らないままひどいこと言ったりしてごめん。でもさ、鹿野の意志を否定するつもりはないけど何も樫井先生だけに頼らなくてもいいと俺は思う。……雪女だからなんだよ。写真部員の度量が、そんなに小さいとでも？
　みんな、鹿野が持ってる独特の世界は面白いしきれいだなって思ってるよ。だから、それを邪魔しようとするやつがいたら、俺たちも全力でま……守るからさ」
　立花くんがそう言うと、その後ろの方で「ひゅーっ」とか「いいぞ立花ー」とかいう先輩たちの騒ぎ立てる声が上がった。
「ちょっと先輩方！　静かにしてください」
　音がびりびりと割れる。立花くんが受話器から顔を離し、後ろに向かって叫んだようだ。
「……えーと、だからな、鹿野。無理にとは言わないけどいつでも戻ってこいよ。そんで、気が向いたらまたぶっとんだ企画のひとつでも提案してくれよ。な？」
　電話越しでも十分に伝わってくる、いつも通りの写真部の空気。――ここで返事をしたら、

いますぐあちらに戻れるだろうか。立花くんの言う通り、何もなかったかのようにまたみんなで騒ごうか。
　いいかもしれない。それも、いいかもしれない。
「……もしもし、鹿野」
　――突然、いま一番聞きたくない声が耳元に響き、一瞬にして全身の鳥肌が立った。
「元気にしてる？　せめて健康かどうかだけでも俺に聞かせ……」
　ツー、ツー、と音が鳴る。無意識のうちに、わたしが電話を切ってしまったのだ。
　わたしは受話器を胸に抱いて、涙をぽろぽろとこぼした。……やっぱり、戻れない。わたしはまだ戻れない。
　樫井先生とは向き合えない。再び夏槻さんがみえるようにならなければ――二度と。わたしがあそこに戻る資格は、失われてしまっているのだ。
　わたしは小さな子どもにかえったようにその場に座り込み、大声を上げて泣いた。

　学校に行かなくなってから、何日が経過したのかもわからないまま、わたしは本の山の中で呆然としていた。
　暑い。頭が働かない。わたしは、どれだけの本を読んだのだろう。五十冊？　百冊？　――もう、たくさんの本と本との間を行き来しすぎて、ここがどこなのかすら定かでない。ああ、いっそ楽だ、と額を伝って行く汗を感じながらわたしは思った。このまま夢の中に、意識をゆだねてしまえば――

　その時、窓の外から蝉の鳴き声が聞こえた。

　胸の中に土と青い草の匂いが広がり、あの夏の記憶が一瞬にして呼び起こされる。わたしは跳ね上がるようにからだを起こし、周囲に積み重なった本を崩しながら必死に『緑の雪』を探した。蝉の声はわたしの記憶の中の音と相まって、幾重にも耳の奥にこだましていく。その余韻を失わないように、わたしは色んな場所にからだをぶつけながらたった一枚の写真を求めた。
　緑と白の対比が見事なその写真を見つけた時、わたしは間違いなく、その中に夏槻さんの黒い後ろ姿を認めた。
「夏槻さん」
　わたしは迷うことなく呼びかける。夏槻さん。夏槻さん。
　すると、彼は肩越しに振り返って、体育祭の時と同じ口の動きで、わたしの声に答えた。しかし、まだ鮮明には聞き取れない。わたしはすべての集中力を注いで、意識をそちらへと持っていった。
「夏槻さん！」
　お願い夏槻さん、聞かせて。いまこそその言葉を。世界を滅ぼす言葉を――
「そ……は……な……だよ」

「……え？」

「それは、みんな、夢だよ」

　顔を上げると、そこは『緑の雪』の中だった。
　凍えるような寒さ、絶え間なく肌を打つ吹雪。それでいて目の前のケヤキの木は、夏にしか見せない最盛の緑の色彩を放っている。ただ写真やわたしの記憶とちがうのは、周囲が完全に静寂に包まれ、景色をすっかり覆ってしまうほど厚く雪が積もっているということだ。
　ふと横に目をやると、黒いコートを着ている、お父さんによく似たひとが立っていた。わたしは思わず「夏槻さん」と声を上げる。
　すると、背後から誰かが、わたしの肩に手を置いた。
「ちがうよ、冬ちゃん。そのひとは夏槻さんじゃないわ」
　その懐かしい声に、わたしはからだを震わせながら振り向いた。
「嘘……嘘でしょう……」
「ここは夢だもん。嘘も本当もないよ」
　そこには、もう二度と会えるはずのなかった、大切なひとがいた。わたしは声を失って手をのばすと、彼女を強く抱きしめた。
「置いてっちゃってごめんね。わたしには、ああするしか方法がなかったの」
　ああ、この匂い。何も言わずともすべてが通じている、この感じ。もう、わたしはこれさえあればいい。もう、他に何もいらない――
「ほうら、冬ちゃん。顔を上げて」
　彼女はあの時のように、小学生のような無垢な笑顔でそう促した。……そうだ、わたしはやるべきことがあって、ここにやってきたのだ。わたしはこの温もりに寄り添っていたいという想いを振り払うように、意を決するように真っ直ぐに前を向く。
「名残惜しいけど、もう時間がないんだ」
　お父さんに似ている彼は、もの悲しげに口を開いた。
「そうよ。あなたはもう『彼』の存在の本質に気づいてしまったのだから。……今度はわたしが紹介するわ。こちらが、本当の『夏槻さん』よ」
　そう言って彼女が指したのは、無個性という言葉がかたちになったような人物だった。わたしがいままで会ったどんなひとにも似ておらず、何者でもない白いキャンパスのようなひと。しかしそれと同時に、彼はわたしがいままで投影し続けてきた「夏槻さん」の、すべてのイメージを内包してもいた。
「……やあ、やっと会えたね」
　降りしきる雪の中で彼は、ケヤキの葉が揺らめく時のようにゆったりとした笑顔でわたしに語りかけた。
「話はもう、聞いているだろう？　ぼくは君の運命で、君はぼくの意志。もっと厳密に言えば、ぼくは鹿野冬葉という物語を書いている作者みたいなものかな」

「作者？」
「そうだよ。雪女として育てられ、氷の世界を胸に抱いて生きる女の子、鹿野冬葉。そんなうつくしい幻想として、ぼくはぼく自身が生きている、ここは別の世界から君を創造した。
　でもね。君はいま、一方的に夢みていたはずのぼくと同等の夢みる力を得た。それは、もはやこの物語に安住するに留まらないだろう。……さあ、冬葉。そのことに気づいたいま、君自身は何を夢にみるんだい？」
「わたしは……」
　わたしは、すべてが白に包まれてしまった故郷の町を見渡して、ふるふると首を横に振った。
「だめ。わたしは、氷の世界しか願えない。ここだって、わたしがそう願ったから……お母さんがいなくなったあの時からずっと雪を降らせ続けてきたから、こんな風になってしまったんでしょう？」
「ううん。できるよ、冬ちゃん」彼女は言った。「思い出してみて、あなたが冬葉と名づけられた理由を。わたしはそれを実現するために、この夢を……『緑の雪』をあなたに託したんだから」
　――冬葉、わたしの名前。雪にさらされても枯れない、ケヤキの葉。
　そう、わたしは何があっても生き続けなければならなかった。でもわたしは、もう夏槻さんの言葉を聞いてしまった。鹿野冬葉というこの「わたし」が夏槻さん のみている夢なのだと気づくことで、わたしの世界は滅びてしまった。どうしたらいいのだろう。どうしたら、わたしは――
「君が、『冬葉』でいるために」夏槻さんはケヤキの木にそっと触れて言った。「君自身が『夏槻』にならなくてはいけない。葉を茂らせるんだよ。君が夢みる主体となり、夢とのつながりを勝ちとるんだ。できないはずはないだろう？　だって現に、君はこうして夏に雪を降らせることができた。夢を、現実にしたのだから」
　わたしもまた、彼に導かれるように太いケヤキの幹に触れた。夢の中だというのにそれはとてもひんやりと硬く、確かに存在しているものに思われた。緑の葉は、わたしに応えるようにざわざわと揺れる。
　すると、全身が粟立ち、最初に夏槻さんの言葉を聞いた時のあの感覚が、徐々に蘇ってきた。それは、みんな、夢だよ。――ああ、この夢の向こう側に誰かがいるのがわかる。
　わたしはもう一度、夢の中へ行けそうな気がする。
「……行ってしまうんだね」
　お父さんによく似た彼は、雪の中に立ち尽くしたまま、ひとりごとのように呟いた。
「そうよ」そして彼女は、その冷たい手をそっと握って言う。「あなたは結局、『夏槻』にはなれないのよ。わたしも同じ。夢の欠片を冬ちゃんに託すだけの存在にしかなれなかった。……そしてわたしたちは、亡霊として永遠に、このうつくしい夢の中をさまよい続けるのよ。ねえ、聡さん」
「うん」その呼びかけに頷くと、彼もまた彼女の名を呼んだ。
「愛してるよ、春子」

――そうして、そっと寄り添うふたりの様子を見届けると、夏槻さんは「さて」と言ってケヤキの木から手を離した。「準備はいいかい、冬葉」
わたしが夢へと意識を向けていくにつれて、夏槻さんの姿がみるみる間にわたしの目にはとらえられなくなっていった。そこにいるのに、存在が感じられない状態。そしてそれは、この氷の世界も同じだった。いまわたしが感じているすべてのものが意味を失って、代わりにみたこともない世界の記憶が流れ込み、からだ中を満たしていく。――わたしはなぜか、それがとても悲しくて涙を流さずにはいられなかった。
「いいかい。冬葉」
ぐにゃぐにゃと曖昧なものになりながら、残酷なほど優しい声で夏槻さんは言った。
「これから、もっとたくさんのものが君にとって意味をなさないものになり果てていくだろう。でも、君が夢に触れてまたもとの世界に戻るためには、自分の名前だけは忘れてはいけないよ。いいね」
わたしは頬を伝う涙を拭って、大きな声で「はい」と答えた。
「さあ、みえるかい。もうひとつの物語と、その主人公が。最後まで呼びかけるんだ！　彼女がこたえるまで、強く！」
彼女……？　そうだ、彼女だ。この向こうに、ひとりの女の子がいる。いままさに、飛び立たんとしている女の子が。待って。こたえて……それは夢なの。あなたも、わたしがみているひとつの夢なの。
――数々の言葉が、現れては消えていく。しかし、わたしはほとんど記号のようなものになりつつも、かろうじて最後まで残っていた歌をとらえると、すかさず口にのぼらせた。

Please don’t flow so fast

気がつくと、わたしは木の下で歌をうたっていた。
……いったい、いつからここにいたのだろう。わたしは、ぼんやりと思った。この丘から、ふもとにある緑の谷のさらに向こうに見える果てしない山脈からは、神さまが祝福しているようなうつくしい朝日が顔をのぞかせ、冷たく優しい光を発している。
これほどの空を見られる場所は、この世界ではもう数少なくなってしまった。――しかし、だからこそ終末を思わせる氷の大地の中で唯一輝くこの谷は、どこまでもうつくしい。わたしは切ない想いでうたい続けながら、まるでひとつの魂が山から生まれ出でているようなその光景を眺めていた。
ふと、明るみになったそのうす青い空を飛んでいた何かが、わたしの歌につられてこちらの方に降りてきた。ふわりと風をまとい、木の葉を舞い散らせながら、わたしの近くに着地する。
――それは、白いワンピースを着たひとりの女の子だった。
「それ、とてもいい歌ね」
彼女は長い髪を風になびかせながら、にっこりと微笑んだ。

「ありがとう、うれしいわ。これは、わたしのお母さんにならった歌なの」
「……もう一回、聞かせてもらってもいい？」
「もちろんよ。だってわたしはあなたに聞いてもらいたくて、こうしてずっと歌っていたんですもの」
　そう言ってわたしはもう一度、傍らの木と共鳴するように高く高く声を響かせた。世界の果てへどこまでも、飛んでいくように。
　そうして一曲を歌い終わると、女の子は満足そうに小さな手を合わせて、拍手をしてくれた。
「……ねえ、お姉さん。さっきから気になってたんだけど、お姉さんがさっきから持ってるその本、なあに？」
「ああ、これ？　これもね、わたしのお母さんからもらったもの。……よかったら、あなたにあげるよ」
「ええ？　そんな大切なものなのに、いいの？」
「いいよ。だってこれも、あなたに渡したくてずっと持ってたものだもの」
「あ、ありがとう！　あたし、なぜだかわからないけれど、これを見た時からずっとほしいなって思ってたんだ」
「それはよかった。その本の題名は、『緑の雪』。『緑の雪』っていうのよ」
「わあ、すてきな名前。絶対に大事にする。……あっ、そうだ、お歌の上手なお姉さん。お姉さんの名前も、教えてよ」
「わたしの、名前？」
　そこでわたしははたと気づいた。自分の名前が思い出せないのだ。
「……どうしたの？」
「わたしの……わたしの名前は……」
　なぜだろう。とても大事なことだったはずなのに、どうしてもわからない。
「名前は……」
　その時、遠く後ろの方から、誰かがわたしを呼ぶ声がした。
――ふ……は……。
「ふ……？」
　それは何か、忘れていた記憶にかすかに触れるような、とても懐かしい響きで――
――冬葉！
「ふゆは……？」

　我に返って振り向くと、そこには見慣れた風景――わたしの生まれた町の夏の風景があった。
「冬葉！」
「……先生！」
　どうしてわたしがここにいるのか、わけもわからないままにわたしは目の前に立っていた樫井先生のことを呼んだ。

「ああ、よかった。東京からここまで来て、会えなかったらどうしようって思ってたよ。無事でよかった」
「先生……どうしてここに」
　わたしは、必死にこの状況を説明する言葉を探しながらそう尋ねた。――本当は、わたしがどうやってこの町までやって来たのかが、一番の疑問ではあったのだが。
「うん、それがだな。実は鹿野の家まで行って、お父さんに居場所を聞いたんだ。そしたら、きっとここにいるだろうって言われたから、仕事ほっぽって特急乗って来たんだよ。……ほら、忘れもの」
　先生はそう言って、鍵をひとつ、わたしに手渡した。
「お母さんのご実家の鍵。何もないけど、数日泊まる分には問題ないだろうって」
「どうして……」
　わたしは、その鍵をぎゅっと握りしめて言った。
「『鹿野とまともに話ができるのは、先生しかいない』。……あ、これは立花ね。それでお父さんからは、『ぼくにはあの子をこの世につなぎ止める力はもうない。だとしたら、この役目はあなたに託されるべきでしょう』とのお言葉をいただいた。いやあ、正直参るよね。そんなこと言われたら、引き受けないわけにはいかないじゃないか」
「ごめんなさい、先生」
「いや、いいんだ。いいんだよ、か……冬葉。これはね、俺自身の意志なんだ。本能のままに動いた結果だ。だから、冬葉は思うことすべてを、俺にぶつけてもいいんだ」
「じゃあ……」
　わたしは、震えるような気持ちを抑えながら上を向く。――そこには、夏になってやっと初めて見た、樫井先生しか持たないたったひとつの笑顔があった。
「抱きしめても、いい？」
「ああ」
　わたしはその返事を待たずに、背のびをして強く先生のからだを抱き寄せた。
　……これが鹿野冬葉。これがわたし。
　その瞬間、世界は包みこむように優しく、わたしを抱きしめ返した。

「鹿野とまともに話ができるのは、先生しかいない」と、立花くんは皮肉とも進言ともとれない口調でそう言ったらしい。「俺には手に負えないっての。まったく……」
「俺もさ、ちょっと気になったから、こないだの部活の時に青田に話聞いてみたんだよ。でも、鹿野との間には何もなかったらしいぜ？　実際にはどうなのか知らんけど。『また本の話してくれるの、楽しみに待ってるって伝えておいてください』だとよ」
「そういえば、冬葉ちゃんって、けっこう美術部でも演劇部でも人気あったよね、樋野くん？」
「ああ、部長の野郎なんか、スカウトしてヒロイン演らせたいって言ってたし。冗談なのか本気なのか知らんが。……まあ、いずれにせよ俺の脚本には、ぼーっとしてるあいつはきっと

ついてけないだろうけどね」
「うーん、あたしも今度ハンドボール部に冬葉ちゃん、連れてってあげたいな。みんながどういう反応するのか、すごく気になる」
「きっと、鹿野さんは自分からは積極的にひととは関われないだけで、周りがちゃんと場に引き出してあげればそれほど嫌がらないと思うの。あたしも生徒会とディベート部ばっかり顔出しててて、あんまり構ってあげられなかったから、それだけは反省点かな」
「……じゃあ、結論として写真部は鹿野の受け入れ態勢万全、後は鹿野次第ということで。満場一致！」

「……結局は冬葉も、ぼくが冬葉にしていたのと同じことをあなたに対してやっていたんですよ。春子の面影を、本当はまったく質の異なる人間に一方的に重ねる、ということをね。
　ぼくは、春子に出会った時からずっと、この女の子が持っているうつくしい世界を守りたい、そう思い続けてきた。でも同時に、ぼくが愛を注ぐことで、その世界を壊してしまうんじゃないか、という不安もあった。……結果的に正しかったんだよね、その予感は。いまとなっては汚れ役ばっかりさ。ぼくにはあの子をこの世につなぎ止める力はもうない。だとしたら、この役目はあなたに託されるべきでしょう」
　そしてお父さんは、「でも、ぼくもあなたを初めて見た時、少しだけ本気であなたを妻にめとろうか、なんて思ってしまったんですよ」と冗談のように言って、鍵をひと差し指にかけて振り回しながら笑っていたそうだ。

　目を覚まして外を見ると、青々と生い茂る庭に雪が降っていた。
　わたしは思わず目をこする。……これは、夢？　またわたしひとりがみている、幻覚なのだろうか。
「先生、起きて」
　わたしは傍らで眠る先生を揺り起こすと、布団をはねのけて縁側まで歩いていき、屋根の外側に手をかざした。
「鹿野、これって……」
　後ろで目を覚ました先生が、言葉を失っている。わたしの手のひらには、確かに冷たく儚い雪の融ける感触が、じんわりと伝わってきていた。
「先生」
　わたしは、ふいに先生に呼びかけた。
「ここでこうしていても仕方ないわ。お散歩に行きましょうよ」
「……どこに？」
「ケヤキの木のところまで」

「待て、待ってくれよ、鹿野。俺、寒いのは苦手なんだよ」
「もう、先生ったら。ぼうっとしてたら、置いて行きますよ！」

半袖のＹシャツ姿で凍える先生にも構わず、わたしはからだ中の力をふりしぼって柔らかい雪が積もる道の上を駆け抜ける。目指すは、ケヤキの木。線路沿いに立つ大きな木だ。
徐々に速度を落としてケヤキの幹にそっと触れると、わたしは後ろを振り返り、薄着のからだに吹きつける冷たい風に苦労しながら追ってくる先生を待った。
「はあ、いきなり走り出すから、びっくりしたよ……。どうしてこんなに寒い中でそう元気にしてられるんだい」
彼はやっと木の下に辿り着くと、白い息を吐きながらそう言った。
「あら、だってわたしは雪女だもの」
わたしはにっこりと微笑んだ。
――あらためて周囲を見渡すと、入道雲がわき上がる空の下でひまわりが咲き、あぶらぜみが絶えず鳴く夏の町の景色に、白く異質な雪が静かに積もっていくのがみえた。
「きれいだね」
「うん」
「わたしたち、きっと同じ夢をみているんだね」
「うん」
そうして山の方に顔を上げると、ちょうど始発の電車が中に吸い込まれていくその雄大な稜線から、神さまが祝福しているようなうつくしい朝日が顔をのぞかせていた。
「あっ」
唐突に、猛烈な既視感が襲い掛かってくる。知らないはずなのに、生まれる前からずっと知っていたような景色。
――そしてわたしは、その夜明けの空を、白いスカートをなびかせて飛んでいくひとりの女の子をみた。
「先生、いま、女の子が……」
「え？　女の子？　電車の運転手以外、誰もいないよ？」
「……そっか」
わたしも、もう次の瞬間には何もみえなかった。
でも、それでいい。あれはきっとわたしにしか、みえないものだ。わたしの記憶の奥深くに、しまってさえいればいい。
わたしはひとりでそう頷くと、先生から借りていたカメラを町に向けて構え、生まれて初めての写真を撮った。この眩しい景色に瞬きをするように、軽やかな音を立ててシャッターが切られた。

わたしはずっと、いつも誰かに夢みられながらこの世界で生きていく。
けれど、わたしという物語から解き放たれた少女は、世界の果てを越えて飛んでいくのだ。
どこまでも。
どこまでも。

緑の雪

http://p.booklog.jp/book/58216

著者 : 草谷 十織
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/torilune/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/58216

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/58216

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（ http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ